

ヨハンスン 「右手から學生に向ひ」 旦那が、どうぞもう一つのことをお忘れないうらにとおつしやいました。

學生 「もぢくしながら」 君ちよつと話して下さい、君のところの御主人はどういふ人ですか。

ヨハンスン さやうさ。旦那はまあかれこれ屋で、そして何でもござれといふ人でしたよ……

學生 正氣でせうね。

ヨハンスン さあどうですか。——旦那は一生日曜日に生れた子供を探してゐたとおつしやいます、でもどうもほんたうらしくはありません……

學生 何を望んでゐるのでせう。慾ばりな人ですか。

ヨハンスン 何でも従へることが好きですよ……あのとほり車椅子に乗つてトール神(神)のやうに一日ごろ／＼まはり歩いて……方々の家を見てそれを崩して、新道をきり開いて、新開の町をこしらへたりなさいます。さうかと思ふと家の中に闖入して、窓から這ひこんで、人間の運命を弄んで、御自分の敵を殺すまで苦しめて、決して許さうとはしないのです。どうです、想像がつかますか、あの足腰の立たないおぢいさんが、あれで昔は色男であつたのですよ、そのくせ始終女を取られてばかりゐましたがね——

學生 どうしてさう違つたことにうまくばつを合はして行けるだらう。

ヨハンスン あの人はなか／＼狡猾で、女に飽きて來るとうまく向うから出て行かせるやうにするのです……ところでまたあの人は人間の市場で馬どろぼうのやうなことを働くのですね。それはいろ／＼な方法で人間をぬすむのです……現にわたしたちも文字どほり法律の手からぬすまれて來たのです……つまりわたしはあの人だけに弱い尻をおさへられてゐるのでしてね、それでわたしを監獄へ突き出す代りに自分の奴隷にして使つてゐるのです、わたしはたゞパンのために使はれてゐるのですが、そのパンも一向上等なパンではありません……

學生 一體あの人はこの家で何をしようといふのだらう。

ヨハンスン どうも分かりませぬ、随分入り組んでゐるのですからね……

學生 どうも僕はにげ出した方がよささうだな……

ヨハンスン おや、お嬢さんが腕環を落した。ごらんなさい、窓から下へおちますよ……

令嬢腕環を開いた窓から下へおとす。

學生 「靜かに進みよつて腕環を拾ひ令嬢にわたす、令嬢窮屈らしく禮をいふ、學生ヨハンスンの所へ戻る」

ヨハンスン まあにげられるものならにげてごらんなさい……それはどうして思つたほど手軽には行きませんよ、あの人に綱をかけられたらね……何しろあの方は天地の間に何も恐れるものが

ないのだ……尤もたゞ一つある、いや正しくいふとたゞ一人あるが……

學生 待ち給へ、僕は知つてゐるぞ。

ヨハンスン どうして知つてゐるでせう。

學生 僕は推量してゐるのだ。——きつとそれは……牛乳搾りの娘だらう、あの人のこわがるのは。

ヨハンスン あの人はいつも牛乳の車に出會ふと横を向くのです……それからよく眠つてゐて寝言をいひます……きつとハンブルクにゐたことがあるのですね……

學生 あの人は信用の出来る人かね。

ヨハンスン それはどんなことにでも——信用はできますよ。

學生 いまあすこの隅で何をしてゐるのだい。

ヨハンスン 貧乏人のいふことを聞いてゐます、時々ちよつとした言葉をはさんだり、時々石を崩したり、形容していへば、成し崩しに家を壊してゐるのですね。ねえ、わたしはこれで教育のある人間で、本屋であつたのですよ……さあ、やはり逃げて行きますか。

學生 どうも恩に背くわけには行きさうもない……あの人は昔わたしの父親を救つた、そしてこんどはその代りにちよつとした返禮を求めてゐる……

ヨハンスン それは何です。

學生 僕は「ワルキュール」に行かなくてはならないのだよ……

ヨハンスン さういふことは分かりませんが……でもいつも變つた思ひつきをする人です……ごらんなさい、こんどは巡查と話をしてゐます。いつも警官に接近したがるのですね。それであの連中に取り入るのですね、都合のいいやうに籠絡するのですね。でたらめな約束や口實でつなぐのですね。そのくせ始終何かしら探り出してゐるのですよ。まあ見てゐてごらんなさい。晩までに、あの人は圓い客間のお客になつてゐますよ。

學生 そこへ行つて何をしようといふのだ、大佐に何の用があるのだ。

ヨハンスン 推量はしてゐますが、よくは知りません。まああなたが御自分で行つてごらんになるがいい。

學生 僕は決して行きはしないよ。——

ヨハンスン それはあなた次第です——「ワルキュール」へは行きますか。

學生 それが道筋になるかしら。

ヨハンスン さうでせう、あの人がさういつたなら。——まあごらんなさい、まあごらんなさい。あの人が意氣揚々と乞食に戦車をひかせて乗つて來ますよ。そのくせ一文だつてやりはしない、まああの人のお葬式にはいくらか色をつけてやるよ位なことがほのめかしてあるのです。

學生 「車椅子に乗りながら戻つて來る、一人の乞食が車をひいて他の乞食が後からついて來る」おい、きの

ふの出来事の際、生命の危険を冒して大ぜいの人を救つたえらい青年に敬意を表すがいい。アル
ヒェンホルツ君萬歳。

乞食 「帽子を取る、しかし萬歳は唱へない」

令嬢 「窓の所でハンケチを振る」

大佐 「窓からこちらをじろく見る」

老婆 「窓際で立ち上がる」

女中 「露臺の上で、旗竿のてつべんまで上げる」

老人 市民諸君、拍手喝采を願ひます。勿論けふは日曜だが、穴の中の驢馬も、畑の麥の穂も勘辨
してくれるだらう。尤もわたしは日曜日生れの子供ではないが、占ひもやれば、療治もやる。昔水
死人を甦らせたこともあるのだ……あれはハンブルクで、けふのやうな日曜の午前であつた。

牛乳搾りの娘 「現れる。しかししたゞ學生と老人に見えるだけである。娘は水死人のやうに両手を高く上げて
じつと老人を見る」

老人 「はつとして腰をおろし縮み上がる」ヨハンスン、わたしを連れて行け。——大急ぎで。——アル
ヒェンホル君、『ワルキューレ』を忘れてはいけないよ。

學生 これや一體何のことだい。

ヨハンスン まああ見ておいでなさい。見ておいでなさい。

第二幕

圓い客間の中。後景に白い瀬戸製の鏡付燵、置時計と蠟燭立がついてゐる。右手に表廊下、その向
うにマホガニー製の家具をすえた緑色の部屋が見える。左手に棕櫚の木に囲まれ、石像、幕が引ける
やうになつてゐる。後景左にヒヤシントをおいた部屋の扉口、そこに令嬢は坐つて本を讀んでゐる。
大佐が緑色の部屋に入つて手紙を書いてゐる後つきが見える。

ペントツソン 「制服を着た馬丁、表廊下から入つて来る」

ヨハンスン 「燕尾服に白ネクタイの姿で一しよに入つて来る」

ペントツソン さあヨハンスン、給仕をして貰はうぜ、おれは外套をかけて来るからな。君はかう
いふことになれてゐるか。

ヨハンスン おれは晝間は御承知のとほり戦車をまはしてゐるが、晩になると晩餐會のお給仕さ。
そこでこの家へも一度は入つて見たいと思つてゐたのさ……とにかく變つた人たちだな。

ペントツソン うん、並ぢやないよ。

ヨハンスン 音楽會があるのかい。それともどういふことになるのかい。

ペントツソン なあに、いつもの幽霊晩餐會とおれたちがいつてゐるやつさ。お茶を飲む、一言もい

はない。せいぜい大佐が一人で何かいふ、それでみんなパンをかじる、一齊にかじり出すのだ。それはまるで屋根裏で鼠がかり／＼やるやうな音さ。

ヨハンスン　なぜ幽霊晩餐會といふのだい。

ベントツソン　だつて幽霊のやうに見えるからさ……で、あの人たちは二十年もそれをやつてゐる、いつも同じ人で、同じことをいつて、いや同じことをだまつて、恥をかくまいとしてゐるのだ。

ヨハンスン　この家には奥さんはゐないのかい。

ベントツソン　それはゐるさ、だが少し足りないのだ。一日小部屋に入りこんでゐる、目をあけて

光が見られないのだ……そこで坐つたきりさ……(壁についたタペストリー張りの戸を指さす)

ヨハンスン　あの中にあるのかい。

ベントツソン　さうだよ、だがいつておくが、よほど並とは變つてゐるぜ……

ヨハンスン　ちやあどんな風なのだ。

ベントツソン　とんと木乃伊さ、見せてやらうか。(タペストリー張りの戸をあける)ほらあすこにゐる。

ヨハンスン　やあ大へん……

木乃伊　「赤ん坊のやうに口を利く」なぜ戸を開けぬの。ちめておかなくては、いけないぢやないか。

……

ベントツソン　「同じく赤ん坊のやうに」た、た、た。坊や、おとなちゆくちるんだよ、ちゆると

いゝもの上げるからね——いい子の鸚鵡ツ子や。

木乃伊　鸚鵡のやうに」いい子の鸚鵡ツ子や。ヤーコプはゐるかい、クルルル。

ベントツソン　あいつは自分で鸚鵡のつもりでゐる。まあそんなものかも知れない……(木乃伊に)

おいポリー、口笛を吹いてごらん。

木乃伊　「口笛を吹く」

ヨハンスン　わたしは随分いろんなものを見たが、こんなのははじめてだ。

ベントツソン　あゝ、家が古くなると徴が生えるし、人間が長く一しよにゐて、お互にいちめ合ふと気がへんになるよ。この奥さんも——靜かにしろポリー。この木乃伊殿もここに四十年入つてゐるのだ——同じ人間、同じ道具、同じ親類、同じ友達……

ベントツソン、また木乃伊をしまふ。

ベントツソン　一體この家に昔どんなことがあつたのか——それはほとんど知らないのだが……君
見ろ、この石像を——それが若い時分の奥さんだ。

ヨハンスン へえ、驚いた、これがあの木乃伊かい。

ベントクツソン さうだよ。——いやはや泣きたくなる話よ。——だがこの奥さんは想像力か何か知らない力で、あのおしやべりな鸚鵡の性質を自分につくり上げたのだね——あの人はかたはや病人がきらひなのだ……あの人は自分の娘が病氣だからきらひなのだ……

ヨハンスン あのお嬢さんは病氣なのかい。

ベントクツソン 君は知らなかつたのかい。

ヨハンスン うん。——それで大佐は、あれやどういふ人だね。

ベントクツソン いまにわかるよ。

ヨハンスン 「石像ながめる」考へると恐しいね……この奥さんはいまいくつになるのだらう……

ベントクツソン それは誰も知らない、だが人の話では三十五の時に十九位に見えたさうだよ……で大佐には、やつと十九になりましたといつてゐたものだ……この家ではね……どうだ君、なぜあの眞黒な日本屏風を寝椅子のわきに立てておくか知つてゐるかい。——あれを死人の屏風と名をつけてね、誰かいよく死ぬといふ時にあれを立てまはしてそつくり病室のやうに圍ふのだ……

ヨハンスン 實に氣味の悪い家だね……それをあの學生はさも天國へでも來るつもりでやつて來

るのだ……

ベントクツソン どの學生さ。あゝ、あの男か。今夜來る筈だつたな……大佐とお嬢さんがオペラで會つて、二人ともすつかり氣に入つてしまつたのだ、……だがこんどはおれがたづねる番だぜ、君の主人といふのは何だい、車椅子に乗つてゐる支配人さんは、

ヨハンスン あの人もやはり來るよ。

ベントクツソン 呼ばれてはゐないぢやないか。

ヨハンスン なあに、いざとなれば呼ばれなくつてもやつて來る、……

老人 「廊下に現れる。フロクコート、シルクハット、松葉杖。そつと入つて來て、耳を立てて聞いてゐる」

ベントクツソン あれやたしかにくへないおやぢに違ひないよ、なあ。

ヨハンスン どうしてなか／＼さ。

ベントクツソン あいつは悪魔そつくりといふ顔つきぢやないか。

ヨハンスン おまけに魔法使ひときてゐる。——それやしまつてゐる戸を平氣でぬけて入つて行

くのだよ……

老人 「つと寄つてヨハンスンの耳をつかむ」この縁でなしめ、氣をつける。「ベントクツソンに」どうぞ

大佐さまに、わたしがまゐつたとお取り次ぎ下さい。

ペンクツソン え、でもお客があるところですから……

老人 それは知つてゐます。しかしわたしが上がることは大抵——覺悟しておいでのことです。尤もそれを望んでゐられるかどうか知らないが……

ペンクツソン さうですか。お名前は何でしたつけ、支配人フンメルさんでしたね。

老人 そのとほりです。

ペンクツソン 「廊下を通つて緑色の部屋へ出て行く、入つたあとの戸をしめる」

老人 「ヨハンスソンに」 消えてなくなれ。

ヨハンスソン 「もじくする」

老人 消えてなくなれ。

ヨハンスソン 「廊下の向うに姿を消す」

老人 「部屋を見まはす。石像の前に立ち止まつて深く驚いた様子」 アマリーだ……あの女だ……あの……だ。

部屋の中を歩きまはり、いろいろなものを手にとつて見る。鏡の前に立つて付け髪を直す。さて石像の方へ立ち戻る。

木乃伊 「小部屋か」 かはいやちい鸚鵡ツ子や。

老人 「ぎよつとする」 あれや何だ。この部屋に鸚鵡がゐるのか。だが何も見えないぢやないか。

木乃伊 そこにゐるのはヤーコップかい。

老人 お化が出るのか。

木乃伊 ヤーコップや。

老人 おれはこはくなつたぞ。——ぢやあこの家にはこんな祕密をしまつてあるのだな。「顔を眺めて小部屋の方へ背中を向ける」 これはあの男だ——あの男だ。

木乃伊 「小部屋から出て来て、老人の付け髪をひつげる」 クルルルレ。クルルルレかい。」

老人 「足を宙に浮かしてにげ出す」 ひやあ、たまらない。——何だ、これは。

木乃伊 「人間の聲で」 ヤーコップ、お前さんかえ。

老人 なるほどおれはヤーコップだが……

木乃伊 「感動をもつて」 それからわたしはアマリーよ。

老人 いや、いや、いや……とんでもないことだ。

木乃伊 わたしそんな風に見えるの。さうだらうね。——だが昔はあゝだつたのだよ。「石像を指さす」 生きてゐる位いいことはないねえ……わたしは大抵あの小部屋に入つてゐる、人を見てはな

らないし、見られてもならないのさ……でもヤーコプ、お前さん、ここで何を探してゐるの。

老人 子供だよ。二人の間の子供だよ……

木乃伊 あの子はあすこにゐるよ。

老人 どこに。

木乃伊 あすこのヒヤシントの部屋に。

老人 「令嬢を見つける」あゝ、あれだ。

問。

老人 あの子のおとうさんは何といふだらう。大佐のことをいふのだがね、お前さんの御亭主のね。

木乃伊 わたしいつかあの人と喧嘩をした時に何もかもいつてしまつたのだよ……

老人 ふん、それで。

木乃伊 あの人わたしといふことをほんたうにしないのさ。そしてかういふのだよ、女といふやつは誰でも亭主を殺さうと思ふと、きまつてそんなことをいふものだね。それでも何でもあれは大した罪悪さ。あの人的一生は欺きであり、あの人の家系は穢されてしまつたのだよ。わたしは度々貴族名鑑のやうなものを讀んで、あとで考へるのだよ、なあにこの人の系圖だつても渡りものの女中同様でたらめなお寺の出生證明書で出来てゐるのだ、こんなものがあてになるものか。

いづれ懲治檻ものさね。

老人 よくあることさ。お前さんなぞも生年月はあやしかつたと覚えてゐる。……

木乃伊 それはわたしのおかあさんが教へてくれたのだから——あの方はわたしのせゐではないのよ……と……ところでお互の罪惡については、やはりお前さんによけい罪があるのだよ……

老人 なあに、お前の御亭主がかういふ罪を犯させるもつとをつつたのだ、あいつはわたしの許嫁を取つて行つたのだから。——わたしは相手を懲らしめるまで許すことのできない生れつきなのだ——これは止むを得ない義務だと思つてゐる……それはいまでもさう思つてゐる。

木乃伊 お前さん、この家で何をしようといふのだい。何を求めてゐるのだい。どうしてここへ入りこんで来たの。——わたしの娘に關係したことなのかい。あの子に指でもさはつたら、お前さんは死ななくてはならないよ。

老人 わたしはあの子のためになつてやりたいのだ。

木乃伊 その代り、お前さん、あの子のおとうさんはいたはつておくれだらうね。

老人 いゝや、そんなわけには行かない。

木乃伊 そんならお前さんは、この部屋で、この屏風の後で、死ななくてはならないよ。

老人 さうならないとも限らない……だがおれは一度卿へた以上口から離すことはしないのだ……

木乃伊 お前さんはあの子を學生と夫婦にしようと思つてゐるのだね。なぜさ。あの男は何でもないぢやないか。何も持つてはゐないぢやないか。

老人 あの子はわたしの力で金持になるよ。

木乃伊 お前さん、今晚呼ばれてゐるのかい。

老人 いや、だがおれは幽霊晩餐會に招待して貰ふ考だ。

木乃伊 誰が来るか、お前さん、知つてゐるのかい。

老人 よくは知らない。

木乃伊 男爵さ……あの人はこの上の部屋に住んでゐて、お舅さんはけふ晝過ぎにお葬式をしたところだよ……

老人 あの男は番人の娘と結婚するために離婚することになるだらう……あの男ももとはお前の色男だつたな。

木乃伊 それからお前さんの昔の許嫁、うちの人が誘惑したといふあの人が来る……

老人 結構な集りだ……

木乃伊 あゝ、どうぞして死にたいものだねえ。ほんたうに皆な死んでしまへるといいのだがねえ。

老人 それを何だつて、お前さんは一しよにその中に入つてゐるのだ。

木乃伊 罪惡と祕密と恥辱がお互を十重二十重に絡みつけてゐるのだよ。わたしたちはもう何度といふ數知れないほど喧嘩をしては別れたものだ——それでも何でも、もと通りつながつてしまふのだ。……

老人 大佐がやつて来たやうだな。

木乃伊 ちやあわたしはアデルの部屋へ引っこみませう……

間。

木乃伊 ヤーコブさん、よく考へてしておくれよ。あの人をいたはつてやつておくれよ。

間。

出て行く。

大佐 「入つて来る、冷淡に、氣を許さない風で」どうぞ、おかけ下さい。」

老人 「そろ／＼腰をかける」

間。

大佐 「じつと老人を見る」この手紙を下すつたのはあなたですか。

老人 さうです。

大佐 あなたはフンメルとおつしやるか。

老人 さうです。

問。

大佐 承ればあなたはわたしの未拂込株券の全部を買ひ占められたさうですね、するとわたしはど
うでもあなたの意のままになるばかりです。どうなさらうといふのですか。

老人 何らかの方法でお支拂を願ひたい。

大佐 するとどういふ方法で。

老人 非常に簡単な方法です。金の方のことを申すのではありませんよ——たゞどうかあなたのお
うちへわたしを客として迎へて頂きたい。

大佐 そんなつまらないことでよろしかつたら、どうぞ……

老人 有難う。

大佐 それからあとは。

老人 ベンクツソンを解雇なさい。

大佐 なぜさういふことをしなければならぬのです。あれは長年わたしの所にある忠僕です——
忠勤を表彰されて、賞牌をも貰つてゐる男です。どうしてそんなことをしなければならぬでせ

う。

老人 いくらいいところがあつても、それはたゞあなたの想像にとゞまるのです。あれは上邊に見
えるやうな男ではありません。

大佐 では一體どういふ人間だといふのだ。

老人 「氣をのまれて」いや、全くですよ。——とにかくベンクツソンは出して貰ひませう。

大佐 君はわたしの家庭に立ち入つて指圖をするつもりですか。

老人 さうです。このとほりそこに見える限りのものはすべてわたしの所有です、家具も、窓掛も、
皿小鉢も、衣類棚も……その他いろ／＼なものが……

大佐 まだありますか。

老人 残らずさうです。見える限りのものは残らずわたしの所有です、わたしのものです。

大佐 よろしい、あなたの所有としませう。しかしわたしの家柄についた貴族の紋章と家名とけ鮑
くまでわたしのものです。

老人 どうして、それもさうではありません。(問) あなたは貴族ではないのだ。

大佐 馬鹿なことをいへ。

老人 「かくしから一枚の紙を取り出す」まあこの武鑑の書きぬきを讀んでごらんなさい、あなたが

ま名乗つてゐる姓は百年も前に断絶してゐることがお分かりでせう。

大佐 「讀む」なるほどそれに類した噂を聞いたことはある、だがわたしは父親から家名を受けついでのだ。「讀む」なるほど、あなたのいふとほりだ、……わたしは貴族ではない——昔からさうではなかつたのだ。それではこの印璽用の指環をとります——なるほどこれはあなたのものだ……どうぞおとり下さい。

老人 「指環をはめる」ではもつと進ませう——あなたは大佐でもないのです。

大佐 わたしが大佐ではないと。

老人 さうです。あなたはもとアメリカの自由軍の大佐であつたのです、ところがキューベの戦争もすみ、軍隊の編成が變つて後は、すべてそれ以前の稱號は廢止されたのです……

大佐 はてね。

老人 「かくしの中に手を入れる」お讀みになりますか。

大佐 いや、その必要はありません……あなたは誰です。そんな風にしてわたしの身の皮を剥いで行く権利がどうしてあるのです。

老人 追々分かりますよ。ところで身の皮を剥ぐとおつしやるが——あなたこそ誰だか知つてゐますか。

大佐 失禮なことをいひなさるな。

老人 まあその付け髪を取つて鏡に向つてごらん下さい。それからついでに入齒を取つて、髯を剃つてごらん下さい……それからペンクツソンにいひつけて、その織の腰當を解いて貰つて、さて召使の誰彼がもとの主人を見分けるかどうかためしてごらん下さい。——どうして女中部屋へはいりこむどこぞの折介だと思ふでせう……

大佐 「卓の上の呼鈴に手をかける、老人それをおさへる」

老人 その呼鈴に手をかけるには及びません、ペンクツソンを呼ぶことにはないのです、そんなことをすればわたしはあなたを捕縛させますぞ……さあお客様たちがやつて来た——まあ差し當り落ちて着いて下さい、あとでまたものとほりの役割で續けてやつて行くことにしませう。

大佐 君は誰です。どうも目つきや聲音に見覚えがあるやうだ……

老人 そんな詮索は入りません、まあだまつていふことを聞いておればよろしい。

學生 「入つて来る、大佐の前にお辭儀をする」今日は。

大佐 やあよくいらした。あの大事件の際あなたの取られた立派な行動は、あなたの名を萬人の口にしたものであつて、そのあなたをこの家にお迎へすることは光榮の至です……

學生 どうしまして、わたしのやうなつまらない身分のものが……光輝ある家名と名譽ある門地のあなたから……

大佐 まあ御紹介しませう、アルヒエンホルツさん、支配人フンメルさんです……どうか婦人連にお會ひ下さいませんか、ちよつとこちらの方とお話をつけてしまひますから。

學生 「ヒヤシントの部屋へ案内される、そこできまり悪さうに令嬢と話をしてゐる姿が見える」

大佐 立派な青年です、音楽もやれば歌もうたふし、詩も作る。あの青年が貴族であれば、同族の出身でさへあれば、わたしは何もいふことはないのだが……全くだ……

老人 いふことがないとは何に對して。

六佐 わたしの娘が……

老人 あなたの娘だといはれるのですか。ついでに伺ひますが、なぜお嬢さんはいつもあすこの部屋にゐられるのです。

大佐 あれは外に出てゐなければ、ヒヤシントの部屋にゐるときめてゐるのです。これはあれの好みですよ。……あゝ、ベヤータ・フォン・ホルスタインクローナ嬢がやつてお出でだ……立派な婦人です……身分なり境遇に相應する財産も持つてゐられる。

老人 「一人言」わたしの許嫁だ。

許嫁 「白髪の女、足りない女らしく見える」

大佐 ホルスタインクローナ嬢、フンメル支配人です。

許嫁 「お辭儀をして腰をかける」

男爵 「入つて来る。こそく見まはす、喪服を着てゐる、腰をかける」

大佐 スカンスコルク男爵です……

老人 「立ち上がることなしに傍白」あれや寶石どろばうだつたと思ふ……「大佐に」木乃伊も出したらいかゞです、それで會衆は揃ふでせう。

大佐 「ヒヤシントの部屋の戸口で」ボリ！

木乃伊 「出て来る」クルルレ。

大佐 青年も呼ぶのですか。

老人 いや。青年はよしませう。あの連中は手つかずにそつとして置いてやりたいのです……

一同沈黙のまゝまるくなつて腰をかける。

大佐 それでは茶を命じませうか。

老人 何のためにそんなことをするので。誰も茶を飲まうとは思つていません、お互に上邊をつくるのはよませう。

問。

大佐 では話をしませうか。

老人 「ゆつくりと間をもつて話す」時候の話をしませうか、お互に知つてゐることだ。お互の御機嫌をたづねるか、それも知つてゐることです。寧ろ沈黙がましです。すると思想が聞えて来る。過去が目に見えて来る。沈黙は却つて何もかくすことが出来ない、言葉は却つてものをかくします。わたしはこの頃讀んだのだが、元來言語がいろ／＼に違ふといふのは、もと實際野蠻民族の間で、或種族の秘密を他の種族にかくす必要から起つたのだといふのです。すると言葉といふものは暗號であつて、その鍵を見つければ、世界のあらゆる言語は分かる筈だ。しかしそれがために鍵なしには秘密をさぐる事が出来ないといふことにはならない、こと更父親たる資格を證明しなければならぬ時などは、案外秘密の推察がつくのです。しかし法廷の證人となると、あれは少しちがひます、二人虚偽の申し立てをする證人があつて、それが一致すれば完全な證據になるのです。しかしわたしがいま持ち出さうとする争議に對しては證人は役に立たない。自然は人間に羞恥の感情を興へて、當然隠すべきことを隠さうとすることを許したのであります。併しながら時として

さういふ氣もなしに、勢ひに迫られて秘密を暴露することがある、嘘つきの假面をぬがせ、惡漢の皮をひきめくるやうな成り行きになるのもやむを得ないので……

問。皆顔を見合せてだまつてゐる。

老人 どうも實に静かですね。

長い沈黙。

老人 例へばこちらの御家庭などがさうです、この立派な御家庭、この美しい御家族、美と教化と富が一つに集つてゐるこのお家で……

長い沈黙。

老人 ここにお集りの皆さんはお互誰だといふことは御承知でせうね。……わたしはわざ／＼それをいふ必要はありません……またあなた方は知らないふりをしてゐられるが、わたしが何者であるかは御承知でせう……さてあちらの部屋にはわたしの娘がをります、わたしの娘ですよ、それも御承知でありませう……あの娘は、なぜといふことを知ることのないために、生活の楽しみを失つてゐるのです……實にあれはこの罪惡と虚偽とあらゆる偽善の空氣の中でしぼんで行くのです……そこでわたしはあれのために一人の友達を探してやりました、その友達と接近することによつて、あれは氣高い行爲から發するところの光と熱をうけることが出来ませう……

長い沈黙。

長い沈黙。

六〇四

老人　それが即ちわたしがこのお内へ上がった使命であります。不潔な雑草を拂ひ、恥辱の垢を洗ひおとし、一切の帳尻をしめきつて精算をすませたところで、わたしがさし出したあの青年が、この家庭で何事か新しいことをはじめるやうにいたしたのであります。

長い沈黙。

そこでどうか皆さん、御随意にお引き取りを願ひたい、いつまでもゐられると逮捕させますよ。

長い沈黙。

お聞きなさい、時計が時を刻んでゐるのが、壁の後の茶立蟲そつくりではありませんか。お聞きなさい、何といつてゐますか、「時だ。時だ。」といつてゐるのです。もうしばらくで時計が打てば、いよいよあなた方の時が盡きる、するといやでも行かなくてはなるまいが、それより早いことはないのだ。たゞし時計はいよゝゝ打つといふ前に、まづおどすのです。ほら、あれです、「さあ時計が打つぞ。」と警告してゐるのでせう。——なあにわたしだつて打つて見せる……〔松葉杖で卓を打つ〕 どうです、聞えましたか。〔沈黙〕

木乃伊　〔時計の傍へ行つて針を止める。さてはつきりと眞面目に〕しかしわたしは時を途中で止めることが出来ません——わたしは過去をないものにする事が出来ません、出来たことを出来なかつた昔に

ることが出来ます。しかもそれを賄賂をつかつてするものではありません、おどしてするものではありません、たゞ悩みと悔いによつてするだけです。

老人の傍へ進み寄る。

われ／＼は哀れな人間であります、それはお互に知つてゐることです。われ／＼は過を犯します、罪を犯します、それは誰も免れないことです。われ／＼は上邊にさう思はれてゐるとほりのものではありません。しかし元來は現在のわれ／＼自身より一そういものであるといふことは、お互に自分の過失をよくないことだと考へるのでも分かります。しかしヤーコプ・フンメルさん、お前さんばかり名を名のつて、わたし達の裁判をしようといふのは、却つてお前さんがわたし達哀れなものよりも更にいけない人間だといふことを證明するばかりです。お前さんもやはり、さうあると思はれてゐる人物とはちがふのですね。——お前さんは人間の魂をぬすむものです。お前さんは昔あられもないでたらめた約束で、わたしの魂をぬすんだでせう。お前さんはけふお葬式をした領事を殺したのです。貸金の證書で首をしめたのです。お前さんはこんどはあの學生の魂をぬすまうとしてゐます。つい一文だつて借りてゐもしないあの人の父親に對する借金をいひ立てに、あの人を釣つてゐるのです……

老人　〔立ち上がつて物をいはずとつとめるが、どうしても椅子に引き止められるやうになつて、次の言葉の間

だんく、だんく體がすくんでちよこまつて行く」

六〇六

木乃伊　しかしここに一つお前さんの生涯の中の暗い箇所があつて、それがどうもよく分からない。しかし多分……ベックツソンがそれを知つてゐようかと思ひます。

卓の呼鈴を鳴らす。

老人　いゝや、いけない。ベックツソンは困る。あれは困る。

木乃伊　あゝ、やはり知つてゐるのだ。「また呼鈴を鳴らす」

この時廊下の戸口に牛乳搾りの娘現れる、但し老人の他誰にも見えない、老人一人ふるへ上がる。娘の幻が消えると、ベックツソンが入つて来る。

木乃伊　ベックツソン、お前この方を知つておいでかえ。

ベックツソン　えゝ、わたしはこの人を知つてゐます、そちらでも知つてゐる筈です。御存じのとほり世の中は移り変わるもので、わたしが今は使はれてゐますが、もとはこの人がわたしに使はれたものです、そこでこの人はまる二年の間わたしの家の臺所へ来て居候飯をたべてゐたものだ、——何しろ三時頃には出なくてはならないのだ、二時といふと食事をすまして出て行くのです。——お蔭で内のものはさめたものをたべなくてはなりませんでした——その野郎のたべた残りをね。ところがこいつは大抵先にスープを吸つて行つてしまふので、あとでは水を埋めて薄くして

飲まなくてはならなかつた——こいつは吸血鬼のやうに家の中に入りこんで残らずの養分を吸ひとつてしまひました、それでわたし共は骸骨同様にされてしまつたのです。それからわたし共がうちの炊事女をどろぼうだといつたといふので、この男はもう少しでわたし共を牢に入れるところでした。——その後わたしがこの男にハンブルクで出つくはした時には、名前が變つてゐました、高利貸だか何だか因業な商賣をやつてゐたのです——ところがこいつは何でも犯罪の現場を見られたといふので、その發覺を恐れて、一人の娘をだまして氷の上へつれ出して、おぼれさせた科で訴へられたこともあります……

木乃伊　「老人の顔を手で撫でまはす」それがお前さんの正體だ、さあそれでは借金の證文や遺言狀を出しておしまひ。

ヨハンスン　「表廊下の扉口に現れる。この場の光景を非常な興味でながめてゐる、これでもう奴隷の境遇はのがれたと思つてゐる」

老人　「一束の書類をかくしから出して、卓の上にはふり出す」

木乃伊　「老人の背中をさする」鸚鵡ツ子や、そこにゐるのはヤーコップかい。

老人　「鸚鵡のやうにいふ」ヤーコップだよ——カカドラ。ドラ。

木乃伊　時計を打たしてごらん。

老人 「時計のぢり／＼いふやうな聲で」 打たなくてさ。「ほとよぎすの聲を出す、時計の眞似をして」 くつくくつく、くつくくつく、くつくくつく、くつくくつく。

木乃伊 「小部屋へ入る、タペストリー張りの戸を開ける」 さあ時計が鳴つた。——お立ち、この中にお入り、そこにわたしは二十年も入れられて、自分の罪に泣いてゐたのだよ……そこに縄がかゝつてゐる、あれはお前さんが二階の領事の首を絞めた縄の代りだ、お前さんの恩人の首を絞めようとした縄の代りだ、入れ。

老人 「部屋の中に入る」

木乃伊 「戸をしめる」 ベンクツソン、屏風をお立て。死人屏風を。

ベンクツソン 「戸の前に屏風を立てる」

木乃伊 さあそれですんだ。——どうぞ神さまのお恵みがこの人の魂の上にごさいますやうに。

一同 アーメン。

長い沈黙。

ヒヤシントの部屋で、令嬢が學生のうたふ歌に合わせて壺琴を弾いてゐるのが見える。
前曲につゞいて歌。

太陽の光を見たときに

わたしは隠されたものを見たやうに思つた。

何人にも爲たことの報いはある、

善を行ふものは幸福なるかな。

憤に任した暴行に對しては、

惡を以て償つてはならぬ。

お前が嘆きをかけた相手をばやさしく慰めよ、

それはお前のためになることだ。

罪を犯したことの無い者は誰にはゝかる所もない。

罪なく生きるといふことはありがたいことだ。

第三幕

六一〇

やゝ奇怪な様式に飾られた部屋。東洋風の感じである。そこにもここにも様々の色のヒヤシントの花。瀬戸製の燵の棚の上に大きな佛像、その腹の所に一つ球根が置いてある。それから一本の葱の葉が生えてゐる。(アリリウム・アスカロニカム)その莖の先にはまん丸い花房、眞白な星に似た花をのせてゐる。後景右手に圓い客間へ通ふ戸口、その中には大佐と木乃伊が何もしずじつと坐つたままでゐるのが見える、死人屏風の一部分も見える。左手に食堂、並に臺所へ通ふ戸口。

學生と令嬢(アデル)卓に向つてゐる。女は堅琴を持ち、男は立つてゐる。

令嬢 あなたわたしの花をうたつて下さいな。

學生 それがあなたの心の花ですか。

令嬢 わたしのたゞ一つの花ですわ。——あなたヒヤシントはお好きですか。

學生 僕は何よりも好きですよ、あのすんなりと眞直に球根から生えてゐる少女らしい形が好きです。根は根で水の上に浮いてゐて、その白い、きれいな根を色のない水の底に浸してゐるのですからね。わたしはこの花の色が好きです、雪のやうに眞白で無垢な清い花もあれば、蜜のやうに

黄色くつて可愛らしい花もあります、薄赤くみづ／＼しいものもあり、眞赤に熟した色もあります。けれども取り分けて美しいのは、あの青い色の、明け方の露のやうに青い、深い目の色のやうに青い、眞實の色が好きです……わたしはこの花を金や眞珠よりはるかに好いてゐます。僕は子供の時からこの花を可愛いとも思ひ、不思議にも思ひました、どれを見てもそれぞれにわたしのもたない好きな美しい性質をみせてゐるのですからね……でもしかし……

令嬢 でも。

學生 わたしの愛情は報いられません。この美しい花は僕を憎んでゐるのです。

令嬢 どうして。

學生 この花の香は春の初めに融けかけた雪の上を吹く風のやうに鋭く爽やかで、僕の心を掻き亂します、僕に目まひを起させます。心が暗くなつたやうになつて、無理にも部屋の中に僕を押しこめるやうにしますので、僕に毒の矢を射かけて心を痛くします、頭を火のやうにほてらせませう。あなたはこの花の祕密を御存じではありませんか。

令嬢 をしへて下さいな。

學生 しかしその前に花の形の表す意味を説明しませう。あの水の中に浮いてゐるか、沃土の中に養はれてゐるかしてゐるこの球根は地球ですよ。それから莖が眞直にのびてゐる、あれは宇宙の

軸ですよ、そのてつべんに六筋の光に別れた星の花がついてゐるのです。

令嬢 地球の上に星があるのね。まあ雄大な考ね。あなたどこからその考を得ていらしたの。どうして発見なすつたの。

學生 考へさして下さい。——さうです、あなたの目ですよ。——するとこれは宇宙の縮圖ですね。だから佛陀が地球の球根を胸に支へ、その慈眼を開いて、やがてそれが高くく伸びて、そのまゝやがて天に變る姿をじつと見ようとしてゐるのでせう……哀れな地球がいつか天になるのです。それを佛陀が待つてゐるのですよ。

令嬢 それでわたし分かりましたわ——松雪草の花はやはり百合のやうに——ヒヤシントの花のやうに、六つに分れた光ではありませんか。

學生 そのとおりです。——すると松雪草の花は隕星なのです……

令嬢 そして松雪草は雪の星ですわ……雪の中から生れたのですわ。

學生 でも恒星の中で一番大きくもあるし、美しい黄色と赤の狼星、あれはあの黄色と赤の花びらに六つの白い光をつけた黄水仙ですね……

令嬢 あなたは葱の花をごらんになつて。

學生 え、見ましたとも——あれは球の中に花を咲かせるのです、それは白い星が一ぱいちらば

つた大空のやうです……

令嬢 まあなんて大きな。それは誰の考なの。

學生 あなたの考ですよ。

令嬢 あなたのよ。

學生 二人のです。——わたしたちはお互いしよになつて一つ考を生むのでせう。わたしたちは結婚してゐるのです……

令嬢 まだですわ。

學生 この上に何が残つてゐるでせう。

令嬢 待つていらつしやい、辛抱して、お互にためして見るのよ。

學生 よろしい、僕をためして下さい。

同。

學生 ねえ、なぜ御両親はあすこにじつと坐つたまゝ、一言も物をおつしやらないのでせう。

令嬢 それはあの人たちが何もいふことがないからですわ。だつて一人のいふことをほかの一人が信じないのですもの。おとうさまはかういふ風におつしやるのです、何のために口を開くのだ、われわれはお互にもう欺き合へないやうになつてゐるのではないかとね。

學生 それは恐しい言葉ですね……

令嬢 故事女がやつて来ました……ごらん下さい、あんなに大きく肥りかへつてゐますから……

學生 何しに来るのでせう。

令嬢 食事のことを聞きに来るのですよ。だつておかあさまが病氣になつてからは、わたしが家のことを見てゐるのですからねえ。……

學生 われ／＼は臺所のことなぞ構ふ必要があるのですか。

令嬢 だつて食べなくてはなりませんわ……あなたあの女に會つて下さいな、わたし會ひたくないのです。

學生 あの女はどういふ女です。

令嬢 あの女は人の血を吸ふフンメルの一家のものですよ。わたしたちを生きながらたべようとしてゐる……

學生 なぜ暇を出さないのです。

令嬢 出て行かないのです、あの女に對してわたしたちは何の力もありません、あれはわたしたちの罪惡の報い……今に見ていらつしやい、わたし共はふき消されてしまひます。食ひへらされてしまひます……

學生 ではあなたは何かたべ物が口に入らないのですか。

令嬢 いゝえ、それはいろ／＼な御馳走は出るのですけれど、一向に養ひにならないのです……あの女がスープを煮れば、肉の分は吸つてしまつて、かすと水ばかりをわたしたちにくれるのです。ピフテキをこしらへれば、骨ばかりをしやぶらされるのです。コーヒーを飲めば、おりばかりくれるのです。葡萄酒の瓶は空にして、水を入れて置くのです……

學生 追ひ出しておしまひなさい。

令嬢 追ひ出せないのですよ。

學生 なぜ出来ないのです。

令嬢 それは分かりません。でも、何でも出て行かないのです。誰もあの女に權力を持ち得ないのです——きつとわたしたちの力を取つて行つてしまつたのでせう。

學生 僕が追ひ出してやりませうか。

令嬢 いゝえ。やはり同じこととせうよ。——さあいよくやつて來ます。するとあの女はお晝は何にさせうかとたづねます、わたしがこれ／＼と答へます、あの女はきつと反抗します。そしてあとはきつと自分のいいやうにしてしまふのです。

學生 ちやあはじめからまかしておいたらいいでせう。

令嬢 それはまたさせないのですよ。

學生 どうも妙な家ですね。魔法にかゝつてゐるのだ。

令嬢 さうです。——でもいよ／＼こちらを向きましたわ、あなたを見ましたわ。

炊事女 「扉口で」 うゝん、そのせむぢやないぞ。

齒が見えるほど口を曲げて笑ふ。

學生 出て行け、女。

炊事女 おいらの勝手だよ。「間」——ちやうどいまが勝手だ。「姿を稍す」

令嬢 あなた、おこつてはいけません——勘忍が大切ですよ。これもわたしたちがこの家で受けなければならぬ試みの一つですわ。でもこのほかにもう一人小間使がゐるのですよ。この方は何かするあとから、わたしたちが片づけてやらなければならぬのです。

學生 僕は氣が沈みます。たまらない。Cor in aethere （心よ天が）元氣をつけませう。歌をうたひませう。

令嬢 お待ちなさい。

學生 さあ歌を。

令嬢 辛抱なさいよ。——この部屋は試みの部屋といふのですよ……それはちよつと見るときれいですが、澤山いやなことがあるのです。

學生 不思議ですね。でもその位我慢しなくてはなりませんまい。なるほどきれいだが、少し寒いやうです。なぜ火をたかないのです。

令嬢 煙が入りますもの。

學生 煙突は役に立たないのですか。

令嬢 だめですわ……あなた、あの寫字卓をこらんでせう。

學生 大へんきれいですね。

令嬢 でもびつこなのですよ。わたしは毎日足の下にキルクをかふのです、すると小間使が掃除をする時取つてしまふのです、それでまた新しく切らなければなりません。筆立は毎朝インクでよごれてゐますし、インク壺もやはりさうです、それをわたしは必ずあの女の使つたあとで洗はなくてはならないのです。それは毎朝、お日さまが出るときまつてね。「間」ねえ、あなたが恐らく一番いやだと思ふことは何ですか。

學生 洗濯物をかぞへることでせう、つツ。

令嬢 それがわたしの爲事なんですよ、つつ。

學生 それから。

令嬢 小間使が忘れて行つたあとの窓をしめるために、せつかく寝てもまた起きなくてはならないのです。

學生 それから。

令嬢 梯子をのぼつて行つて、女中が引ツきつてしまつた窓の紐を結んでやらなければならぬのです。

學生 まだありますか。

令嬢 掃いたあとから掃くのです、はたいたあとをはたくのです。煖爐に火を入れたあとから火を入れに行くのです。女中は薪をはふりこんでおくだけですからね。煖爐の蓋を見てやらなければなりません。ガラスをふいてやらなければなりません。食卓は並べかへます。瓶の口はぬいてやりません。窓をあけて風を入れます。わたしの寢床はしき直します。青錆の出てる水注をみがかなければなりません。マツチと石鹼はいつもきれいであります。煙突は掃除します。ランプがくすぶらないやうにしんを切ります。お客のある時はランプが消えないやうに油をついでやらなければなりません……

學生 歌をやりませう。

令嬢 まあお待ちなさいよ。労働と爲事が先ですよ。生活の不淨を遠ざけるために働くのですよ。

學生 しかしあなたはお金持でせう、二人も女中を使つてゐるのでせう。

令嬢 そんなことが何になるのですか、三人ゐたつて同じことです、生きるといふことは疲れるものです、わたしは度々疲れるのですよ。——それからあなたは子供部屋のことを考へたことがありますか。

學生 それこそ一ばん大きな喜びでせう……

令嬢 一ばん貴いね……一體人生はそんなにまで苦勞をする値うちのあるものでせうか。

學生 それはその苦勞から得られる報酬次第ですね……僕はあなたを得るためにはどんなことでも厭ひません。

令嬢 あなたそんなことをおつしやるなよ。——どうしたつてあなたはわたしを自分のものにすることは出来ないでせう。

學生 なぜでせうね。

令嬢 それをお聞きになつてはいけないわ。

學生 あなたは胸環を窓から落しましたね……

令嬢 あれはわたしの手が細くなつたからですわ……

六三〇

炊事女 「日本風の醬油の瓶を持って出て来る」

令嬢 あゝ、いやだ。あそこにわたしはじめみんなをたべてしまふ女がある。

學生 手に持つてゐるのは何ですか。

炊事女 これや色つきの瓶さ、何だかわからない、蛇のぬたくつたやうな字が書いてあるのだ。これや醬油婦人といふ魔法使ひだよ、水をスープにかへるのだ、ソースの代りにするのだ。これでキャベツを煮るのだ、これですつぽんのスープをこしらへるのだ。

學生 出て行け。

炊事女 お前さんたちはわたしの生血を吸ふのだ、そこでわたしがお前さんたちの生血を吸つてやるのだ。わたしが血だけ吸つて、お前さんたちに水だけ返してやる——醬油で色をつけてね、これや色つけだよ、——これでわたしはお暇さ、だがやはり自分のぬたいだけいつまでもあるのだよ。(出て行く)

問。

學生 どうしてベンクツソンは賞牌をもらつたのですか。

令嬢 大した功績があつたといふので。

學生 あの男に過失はないのですか。

令嬢 どうして、それは大ありよ。でも過失の方には賞牌は出ませんからね。(二人は笑ふ)

學生 この家には随分澤山祕密があるのですね……

令嬢 よその家と同様にね——まあお互に祕密は守ることにしませう。

問。

學生 あなたはうち明けたことがお好きですか。

令嬢 適度にはね。

學生 時々僕は、考へてゐることをあらひさらひぶちまけてしまひたい希望が、灼きつくやうに起るのですよ。しかし實際人間が何もかも打ち明けてしまつたら、さぞ世の中の人は驚くでせう。

問。

學生 僕はこの頃ある葬式に立ち合ひました——お寺でね、實に莊嚴な、見事なものでした……
令嬢 フンメルさんのお葬式ですか。

學生 さうです、僕の恩人のね。——棺の先頭に故人の一ばん古い友人が立ちました。その人が葬列の先導になつたのですね。坊さんも取り分け僕に感動を與へました、お有難い説教や、感極つた

言葉でね。——僕は泣きました、ほかの人もみんな泣いたのです。——そのあとでみんな料理屋へ行きました……そこでわたしはあの墓標をかついだ男が、故人の息子と仲よしだといふことを知つたのです……

令嬢 「今の言葉の意味がわかりかれて、相手の顔を見る」

學生 ……そして故人はその息子の友人から金を借りてゐたさうです……

同。

學生 そのあくる日坊さんはお寺の金を着服したといふ科で拘引されました。——結構な話ですよ。

令嬢 まあ。

同。

學生 ところでいま僕があなたについてどう考へてゐると思ひます。

令嬢 それをいはないで下さい、それをいふとわたしは死にますよ。

學生 僕はいひます、いはないと僕が死ぬのです。

令嬢 病院では、何でも考へてゐることを人はいふものですが……

學生 そのとおりです。——わたしの父は氣違病院で終つたのです……

令嬢 御病氣だつたのですか。

學生 いや、健康だつたのです、しかしへんになつたのですね。一度發作を起したのです。で、かういふ事情でした……父はやはり世間並に便宜のため交友と呼んでゐるいつもの交際仲間に取りまかれてゐました。勿論人間は大抵さうですが、碌でもない連中の寄り合ひだつたのです。しかし父も一人ぼつちではゐられませんから、まあそんな交際があつたのですね。ところで人は他人に向つて相手をどう思つてゐるか、少くとも普通では、いふものではありません。父もやはりさうでした。父は彼らがいかに騙つきであるか知つてゐました。彼らの不誠實をどん底から知つてゐたのです。しかし父は利口な人でもありたしなみもよかつたものですから、いつも禮儀を失はずにゐたのです。ところが父はある日、大ぜいの客をしました。晩でした。父は晝間の爲事でくたびれてゐたのです、そしてだまつてゐて見たり、下らないことをお客相手にしやべらなくてはならなかつたり、その心勞でもくたびれてゐたのです……

令嬢 「驚き怖れる様子」

學生 とうとうしまひに父は食卓を叩いて沈黙を要求した上、コップを手に持つて一場の演説をしました……するとどうかした拍子に引きがねがはづれたのですね、この長演説の間に父は會衆残らず片つばしから槍玉に上げて、一々その虚偽の面皮を剥いだものです。さうして置いて、くたびれると食卓の真中に上がりこんで、來客一同に惡魔のところへ走れといひわたしたものです。

令嬢 まあ。

六二四

學生 僕はそこに合わせました。その時の騒ぎは決して忘れません。……父と母が撲り合ひをはじめて、來客は我がちに戸口へにげ出しました……そして父は氣違病院へかつぎこまれて、そこで死んだのです。

間。

學生 まあ人間はあまり長くだまつてゐると、よんだ水のやうになつて腐ります。こちらの家がやはりそれですね。何か腐つたものがあるのですよ。それを僕ははじめてあなたが家へお入りになるところを見て、天國であるやうに思ひこみました……そこで僕は日曜の朝中外に立つて、このお家の中をのぞきこんでゐたのです。さて僕は太佐にもお目にかゝりました、その實は大佐でも何でもない人にね。僕には結構な恩人が出來ました、そのくせ實は大がたりで、つい首をくゝつて死にましたがね。僕は木乃伊にもあひましたが、實は木乃伊でも何でもなかつたのです。それから遺産だか相続権だかのある處女にも……ついにながらひひますが、處女なんといふものが一體どこにありますか。まあそんなものは、人體解剖の博物館で九十度のアルコールに漬つてゐるのを見た位のものです。美なんといふものもどこに一體ありますか。まあ自然の中に、それから僕の氣分が日曜日の晴れ着を着てゐる時にある位なものです。眞實だの信仰だのといふものが、どこに一體

ありますか。お伽噺と子供の空想の中にあるだけです。誓つたこと、約束したこと、それがどこにありますか、僕の想像の中にあるだけだ。

かうなるとあなたの花も僕に毒を注いだものです、だからこんどは僕があなたにその毒を注ぎ返します……僕はあなたに妻になつて、家庭を作つて下さいと頼みました。僕らは詩を作つたり、歌をうたつたり、音楽をしたりしました、そこへ炊事女が入つて來たのです……*Suisun Corda* (心よ上がれ) もう一度火を、紫の焰を、あの金色の堅琴から起して見ませう……やつて見て下さい、どうぞ、膝まづいて、このとほり願ふのですよ……〔令嬢は動かない〕

彼は堅琴を取る、しかし糸は鳴らない。

堅琴は沈黙してゐる。つんぽになつた。まあこの上なく美しいと思つた花もこれほどの毒があるのだ。この上なく毒があるのだ。呪ひはあらゆる創造の上にかゝつてゐる。あらゆる生物の上にかゝつてゐる……なぜあなたは僕の妻にならうとしないのです、それはあなたが病氣だからだ、生命の泉が病づいてゐるからだ……さあ、だん／＼あの炊事女の心の中に宿つてゐる吸血鬼が僕の血を吸ひはじめたやうな氣がする。きつとあれは子供の血を吸ふラミヤなのかも知れない——一家の子供が芽生えのまゝに刈り取られる場合は、大抵寢臺でなければ臺所にきまつてゐる……視力を弱める。毒がある。目をあける毒もある——きつと僕はこのあとの方の毒を持つて生れ

曲 見 曲

六二五

たのだ、なぜといふに僕は醜いものを美として見ることは出来ないし、悪を善とよぶことも出来ないのだ——どうして出来るものか。エス・キリストがちごくへ下られたといふ、それやたゞエスが地上に流浪した話なのだ。地上の氣違病院や監獄や死亡室をめぐつて歩かれたといふ話なのだ——キリストが氣違をとき放さうとしたので、氣違が却つてキリストを殺したのだ。だがどろぼうは釋放された、どろぼうにはいつも同情がある——あゝ、いやだ。あゝ、いやだ。お互に實にたまらない。世界の救ひ主、われ／＼をお救ひ下さい、われ／＼は亡びます。

令嬢 「だん／＼弱つて来て、いまにも死にさうな様子になる、呼鈴を鳴らす」

ベントクツソン 「出て来る」

令嬢 屏風を。早く。わたしは死ぬ。

ベントクツソン 「屏風を持つて来て、開いて、令嬢のまはりに立てる」

學生 救世主は近づいた。汝青白き眠りよ、よく来てくれたねえ。汝美しきものよ、恵まれざるものよ、罪なきものよ、罪なくして憐むものよ、夢のない眠りに入れ、さうしてこんど目をさました時には……人を焼かない太陽がお前を迎へるだらう、塵の立たない家の中に。汚辱を持たない近親が、破綻を知らない愛情が、お前を迎へるだらう……賢い慈眼の佛陀よ、あなたはそこに坐つて、いつか天國が地の上から萌え出る時を待つてゐる、どうかわれ／＼に試みに耐へる力を、意

志の清淨をお與へ下さい。どうぞあなたの希望が恥辱に終らないやうに。

鑿琴の絲自ら鳴る。部屋の中に白い光が溢れる。

太陽の光を見たときに

わたしは隠れたものを見たやうに思つた。

何人にも爲たことの報いはある、

善を行ふ者は幸福なるかな。

憤に任した暴行に對しては

惡を以て償つてはならぬ。

お前が嘆きをかけた相手を慰めよ、

それはお前のためになることだ。

罪を犯したことの無い者は誰にはどかる所もない。

罪なく生きるといふことはありがたいことだ。

屏風の後にうめき聲が聞える。

汝哀れにも幼きものよ。欺きと、罪と、悩みと死の世界に生れたる子よ。永劫の流轉の世界、幻

滅と苦痛の世界に生れたる子よ。天國の主がお前の旅路をいたはつて下さるやうに……

都屋がそつくり消える。そのあとへ後景一ぱいにビョクリンの死の島の畫。

「かくて神は涙の限りを彼らが目よりぬぐはせ給ふ。今ははや死もあらじ、惱みもあらじ、まして嘆きの聲も、苦痛のうめきもあらざるべし、第一の世界かくて終りぬれば。」

微かな音楽、快く痛ましく、死の島の畫の中から聞えて来る。

火

焙 (ペリカン)

舞臺面

客間。

後景に食堂の扉口。右手壁の隅が角切すまになつてゐて、マルコンへ出るやうになつてゐる。
單筭、寫字卓、荒い緋色ひいろビロードのクッションをしいた寢椅子。揺り椅子一脚。

音楽

第一幕。ショパン——即興幻想曲、遺作集第六十六曲。

第二幕。ゴッタルド・ツォスレーンの搖籃の歌。

第三幕。ヴェルフ・フェルナリ——ワルツ曲、「彼は語りぬ。」

人物

母	エリーゼ	寡婦
息子	フリードリッヒ	法律學生
娘	ダグ	
婿	アクセル	ゲルダの夫
グレイテ	グレイテ	女中

第一幕

母 「喪服を着てゐる、一脚の椅子に腰をかけて、うとくしてゐる。をりく不安らしく耳を立てる」

この共同住宅のほかの部屋で、シ・パンの即興幻想曲遺作集第六十六曲をひいてゐる。

グレイテ 「炊事女、後景の扉口から入つて来る」

母 扉をしめて置いて下さいよ。

グレイテ お一人でいらつしやいますか。

母 扉をしめて置いて下さいよ。——一體誰がひいてゐるのだい。

グレイテ まあ若旦那さままでございます。——今晚は雨風でひどいお天気でございますこと……

母 扉をしめて置いて下さいよ。わたしは石炭酸と松板の香がたまらないのだから……

グレイテ さうだらうと存じました。ですからわたしは旦那さまをすぐと焼き場の方へお運びになるやうに申し上げたのでございます。

母 子供たちがこの家で式をやりたいといふものだから……

グレイテ どうしてあなたはまだいつまでもここにゐるのですか。どうしてお越
しにならないのですか。

母 このこの主人がわたしたちを越させないのさ。わたしたちは自分で働くことが出来ないのだよ……
 ……[同]お前さん、何だつて赤寝椅子の覆ひを取つてしまつたのだい。

グレイテ 洗濯に出さなければなりませんので。[同]御承知のとほり旦那さまはそのソファーで臨
 終の息をお引き取りになつたのでございます。それともまあそのソファーをよそへやることにいた
 しませうか……

母 遺産目録が来るまでは何も動かすことが出来ないのだよ……だからわたしはここにじつと閉ぢ
 こめられてゐなければならぬのさ……そしてほかの部屋へ移ることも出来ないのだよ……
 グレイテ 一體それはどういふわけで。

母 思ひ出がね……残らずのいやな思ひ出がね。それとあの胸の悪くなる香がさ……ひいてゐるの
 は悴かゝ。

グレイテ さうでございます。どうも若旦那さまはお内にいらしつても一向面白くない御様子で、
 そはくしてばかりいらつしやいます。そして始終おなかを空かしていらつしやるのですよ。お
 れはついぞ満腹したといふことはなさうだとおつしやるのです……

母 あの子は生れた時からずつと體が弱かつたのだよ……

グレイテ あの牛乳で養ふ子は、乳を放したあとではよほどしつかりした滋養分をとらないといけ

ないと申します……

母 [鏡く]それが足りなかつたといふのかい。

グレイテ さういふわけではございませんけれど、なるべく値の安い、悪いものをお買ひになるや
 うにばかりしていらしつたでせう。そして學校へ行くお子さんが、まがひもの「コーファー」一ぱい
 に、小さなパン一切れで出ていらつしやるのでせう。あれではいけません。

母 内の子供はついたべ物の小言をいつたことはなかつたよ。

グレイテ それはあなたさまにはさうでございます。え、それは遠慮していらつしやるのです
 わ。でも大きくおなりになつてからは臺所へきつと出ていらつしやるのですよ……

母 内はつい暮し向きが樂でなかつたものだからね……

グレイテ あらまあ、わたくし新聞で読みましたよ。旦那さまは度々二萬クローネづゝお預けにな
 つてゐたといふことを……

母 それはいろ／＼な物いりがあるからね。

グレイテ え、え、でもお子さん方はお弱いのですよ。どうもゲルダ嬢さまは、いゝえ若奥さま
 はもう二十歳になつていらつしやいますけれど、十分伸びきつていらつしやらないやうで……

母 何をへらくいふの。

グレート へい〜。〔間〕あの、火を焚きませうか。このお部屋はお寒いでせう。

母 いゝえ、澤山。内はお金を燃してしまふほど豊かではないのだから……

グレート でも若旦那さまは一日寒がつていらつしやいます。爲方なしに外へお出になるか、ピアノに取りついてあたゝまつていらつしやるのですよ……

母 あの子はいつも寒がりやだから……

グレート どうしてそんなにおなりになつたのでせう。

母 いゝかげんにしないか、グレート……〔間〕誰か表にいらつたやうだ。

グレート いゝえ、どなたもいらつしやいません……

母 お前、何かわたしが幽霊をこはがつてゐるとでも思ふのかい。

グレート どうですか存じません……でもわたくしどうせこちらには長くはをりません……まあ何ですか、こちらへお子さん方のお守りに上がったやうなはめになつてゐました……わたし奉公といふものがどんなにつらいものかといふことを知りました、すぐにもお暇したかつたのですが、それをし得ずにゐました。いゝえ、するのが道でないやうに思はれたのでございます……けれどももうたゞ今では、ゲルダ嬢さまはお片づきになりましたし、わたくしの用事も終りましたから、いづれその中、年かんもあけることすし、たゞ一つ気がかりは……

母 わたしお前さんのいふことは一言も分からないよ。まあわたしが子供たちのためにどれほど自分を犠牲にして来たか世間一體が知つてゐます。わたしは家の始末でも自分のつとめでも、どんなに手落ちなくして来たことか……わたしをとやかくいふのはお前さんばかりだ。だがそんなことをわたしは何とも思ひはしない。まあいつでも、お前さんの好きな時に行くがいいさ。あのとほり若夫婦がこの家へ越して来れば、もう奉公人は置かないつもりだ……

グレート まあやつてごらんさい……お子さんたちは大體孝行な方ではないし、まあお金でも持つて行かなければ、お姑さんを大事にはしますまいよ……

母 よけいなお世話だ……わたしはわたしだけのものは出すつもりだし、その上内のことも手傳つてやるのだから……それに内の婿は世間並の婿とは違ふからね……

グレート さうでせうかね。

母 あゝ、さうだとも。あの人はわたしを姑のやうにはあしらはしないで、きやうだいのやうにしてくれる、お友達とまではいはないがね……

グレート 「顔のしぐさ」

母 そんな顔をしてわたしには分かつてゐるよ。わたしは内の婿を好いてゐます、さうしていいわけがあるのだ。それだけの値うちがあるのだ……内の人はあの人を好かなかつた。やつかんでゐた

のだね、やきもちをやくといはないまでも。さうだとも、わたしがもうそんな年でもないのに、やきもちをやいて、わたしを困らしたものだ……お前さん、何かいつたかえ。

グレート 　わたくし何も申しません。——でもどなたかいらしたやうですね……咳をしていらつしやるから、若旦那さまです。火を焚いてはいけませんか。

母 　よけいなことだ。

グレート 　まあ聞いて下さい。わたくしはこちらで始終寒い思ひをしてをりました、始終おなかを空かしてをりました。でもそれは我慢をするとしましても、せめて寢臺には、ちゃんとした寢臺だけには寝かして頂きたいものです。わたくしは年もとりましたし、くたびれてまゐりました……

母 　だからちやうどいまがお前さんの引つこみ時だらうよ……

グレート 　まあね。でもこちらの外間もあることです、あの、人の死んだことのあるわたくしの寢道具は焼き棄てて頂きませう。さうしますれば、よしわたくしのあとに誰かまゐりますやうなことがありましても、あなたは恥をかゝずにすみませう。

母 　誰も來はしないよ。

グレート 　よし來ましても、ゐるものですか……もう五十人から女中が逃げて行つたではございま

せんか……

母 　それはたちのよくない人間だつたからさ、何しろみんな……

グレート 　どうも有難うございます……まあ……。こんどはあなたの番ですよ。それ／＼番があるものです。順番どほりにやつて來るものだからね。

母 　そのお前さんのかへるといふのはついぢきのことかい。

グレート 　え、ぢきですとも。もう／＼早速。あなたが、お考へになつてゐるよりずつと前にね。出て行く。

息子本を持って咳をしながら入つて來る。少し吃る。

母 　扉をしめておいて下さいよ。

息子 　なぜですか。

母 　お前さん、よけいな口返答をおしでない。——何か用かい。

息子 　僕ここで勉強してもいいでせう。僕の部屋はじつに寒いのです。

母 　お前さんはいつも寒がつてゐるのだ。

息子 　じつとしてゐるとよけい寒さを感じます。

息子 「はじめは本を讀むやうな振をする」 遺産目録はまだ出來ないのでですか。

母 なぜそんなことを聞くの。先にお葬式をすまされなければならぬぢやないか。お前さん、おとうさんが亡くなつて悲しくもないのかい。

息子 だつて……でも——おとうさんはあれでもういゝのでせう——あのとほり休ませて上げることが出來たのだから。やうやくのことでおとうさんは休めるやうになつたのですよ。でもそれはそれで別として、わたしがこの先自分の境遇がどうなるか、それを知らうとするに何の差支へもないでせう——一體この先借金しず學位試験までやつて行けるものだからどうか……

母 おとうさんは何も残してお行きにはならなかつたのだよ、それは知つておいでだらう、残つたのは借金だけさ……

息子 でも商賣の方は。

母 商賣といつたつて倉庫が一つあるではなし、品物があるではなし——さうだらう。

息子 でも會社は、名前は、お得意は……

母 お得意は賣り物にはならないからね……〔問〕

息子 だつて、なるといふ話ですよ。

母 お前さん、辯護士の所へでも行つて聞いて來たのだらう……〔問〕 まあそんな風にしてお前さんは、おとうさんのお葬ひをするつもりだね。

息子 いゝえ、そんなつもりはない。——でも何事も自分のためですからね——ねえさん夫婦はどうしました。

母 あの人たちはけさ新婚旅行から歸つて來て、いまは宿屋にゐますよ。

息子 宿屋ならとにかく腹一ぱいたべることだけは出來るわけだ。

母 相變らずお前さんはたべ物のことばかりいふね。お前さん、内のたべ物に不服をいふことがあるのかい。

息子 いゝや、いゝや。

母 でも一つ聞きたいことがある。お前覺えてゐるかえ、この前わたしがしばらく別居してゐなければならぬことになつて、お前さんはおとうさんと二人きりでゐたことがあつたね、あの時おとうさんは、商賣上のことを何もお話しにならなかつたかい。

息子 「本に讀み耽つてゐる」 いゝえ、何も別に。

母 なぜおとうさんが何もあとに残さなかつたか、そのわけがお前さん、わかるかい。だつて何しろ近年は二萬タローネも儲けてゐたのだからね。

息子 僕はおとうさんの商賣のことは何も知りません。でも家が非常に高いといふことでした。

母 さういつてゐなすつたか。借金はどうかね。

息子 知りません。いくらかあつたのでせうが、返したのでせう。

母 するとお金はどこに置いてあるのだ。おとうさんは遺言状をこしらへてあつたらうか、あの人はわたしを憎んでゐたのだ、度々わたしを追ひ出すとおどしなすつたものだ、貯金をかくして置いてあるのぢやないかね。

同。

母 正直にいつておくれ。どうだね、おとうさんはほかにもう一軒世話をしてゐる家があつたのではないか知らん。それでなくともとにかくお金を使はせる女がね。

息子 さういふことはちつとも知りません。でもさういふ筈はないでせう。

母 「耳を立てる」誰か表へ来たやうだね。

息子 いゝえ、僕には何も聞えません。

母 わたしこの頃すつとお葬ひや商賣のことで心配がつづくものだから、少し神経過敏になつてゐるのだ……それはさうと、お前さんは御存じだらうね、ねえさん夫婦がこの家に入ることになつて、お前さんは町で部屋を一つ探すことになるのだよ。

息子 えゝ、それは知つてゐます。

母 お前さん、にいさんは好きでないのかい。

息子 えゝ、あの人はどうも僕の氣に合ひません。

母 でもにいさんはいい人だよ。立派な人物だ。お前さん、あの人を大事にしななければいけませんよ。それだけの値うちのある人だ。

息子 あの人もわたしに對しては好意を持たないのです——それにおとうさんに對しては悪意を持つてゐました。

母 それはどちらが悪いのだらう。

息子 おとうさんは人に悪意を持つやうなことはありません……

母 ないよ。

息子 こんどはどうやら表に人が來たらしい。

母 明りを二つおつけ、でも二つだけだよ。

息子 「電燈をつける」

同。

母 お前さん、おとうさんの額を持つて行つてくれないかい。あすこの壁にかゝつてゐるあれさ。

息子 なぜ持つて行くのです。

母 わたしはきらひなのだ。あれはいかにも意地の悪い目をしてゐるのだ。

息子 僕はさうは思ひません。

母 ぢやあ持つといでなさい。お前さんはそんなに好きなら、大事にして持つてゐるがいい。

息子 「頼をおろす」僕、さうします。

問。

母 アクセルとゲルダが来るだらう。……お前さん、會はないつもりかい。

息子 え、僕は會ひたくもありません……まあ自分の部屋へ行つてゐませう……たゞストーブに少し火を焚いてもいいでせう。

母 わたしたちはお金を無駄に燃してしまふほど、あり餘る身分ではないのだよ……

息子 それを僕は二十年も聞かされて來たのだ、そのくせ外國では馬鹿げた殿様旅行をして、料理屋で百クロローネの晚餐をたべたりする餘裕はあつたのでせう。——それだけが四クラフテルの薪に當ります——一食が四クラフテルですよ。

母 何をくだらないことをいつてゐる。

息子 さうです、何でもわれ／＼は逆なことばかりして來たのだ。まあ、こんどはそれもおしまひ

になるでせう……まあ精算が出来上がりさへすれば。

母 それは何のことだい。

息子 遺産目録とその他のことをいふのです……

母 その他といふのは何だ。

息子 借金だの未解決の問題だの……

母 なるほど。

息子 僕は少し毛織物を買ひたいのですが。

母 いま頃どうしてそんなものがほしいのだ。まあ買ひたければ自分で買ふ工夫をおしなさい……

……

息子 それは試験さへすましてしまへば。

母 ぢやあ世間並に借りたらいいだらう。

息子 誰が貸します。

母 お前さんのおとうさんのお友達がね。

息子 おとうさんには友達といふものはありませんでした。自主獨立の人には友達といふものは出來ないのです、全體友達といふものはお互に感服し合ふところから結ばれるのですからね……

母 どうもお前さん、賢いことをいふね。おとうさんにをそはつたのだらう。

息子 さうです、おとうさんは賢い人でした——たゞ時々馬鹿なことをやりましたがね。

母 お前さん、お聞きよ。——どうだね、お前さんは一體結婚するつもりはないのかい。

息子 まあまつびらです、ひとり者に女の仲間ができるといふだけです。じだらく女に法律の保護を加へてやるといふだけです。一番仲よしの女の友達が、一番たちの悪い敵になつて戦争をしかけて来るだけです。……え、まあ近よらないことですよ。

母 何てことだらう。——お前さんの部屋へお歸り。これでけふのところはわたしお前さんは澤山だ。お前さん、酔つばらつてゐるのぢやないか。

息子 僕は始終何かしら飲んでゐなければならぬのですよ、咳のためもあるし、おなかの足しにもするのです。

母 またたべ物がいけないといふのかい。

息子 いけないといふのではありません、ひどく軽いのです、まるで空気をたべてゐるやうな味ひです。

母 「へんな顔をして」さあもうお出でなさい。

息子 さもなければ胡椒が利きすぎるか、鹽が利きすぎるかする加減で、すぐおなかのすくのです

ね、何のことはない假に味をつけてたべてゐるやうなものです。

母 お前さんは酔つばらつてゐるのだね、勝手にどこへでも行くがいら。

息子 はい。……行きますよ。まだいひたいことがあるのだが、けふは預かつておきませう——え、。「出て行く」

母 「落ち着かない様子、部屋の中を行つたり來たりする、軍筒の引き出しをあける」

婦 「せはしなく入つて来る」

母 「うれしそうに挨拶をする」 あゝやつと、アクセルさん、やつとお出でだね。わたしはお前さんを待ちこがれてゐたのだよ。でもゲルダはどうしました。

婦 あとから來ます。でどうしました、どんな様子です。

母 まあおかけなさい。それよりかわたしの方から聞きたいことがあるのだよ、何しろ御結婚からこつち會はなかつたのだからね。——どうしてそんなに急に歸つて來たのさ。一週間ゐるつもりだつたのだらう。まだけふで三日にしかならないぢやないか。

婦 え、それだけ待つてゐられなくなつたのですよ。正直にお話しすると、まあたまらなく寂しくなつたのです。何しろあなたと御一しよにばかりゐつたものだから、どうも物足りなくてねえ。

母 さうだらうよ。全くさ。わたしたち三人どんな場合にも一しよにゐたのだし、きつとお前さんもやはりわたしに用がないでもなかつたのだね。お前さんにはまんざらわたしが役に立たないでもなかつたのだね。

婦 ガルダはほんのねんねえで、世間のことは分からないでせう。それにどうも偏見があつて、我儘なところもあり、どうかすると氣違ひじみてゐることがあるのですよ……

母 ところで、新婚旅行はどうでしたね。

婦 極上でしたよ。それは極上。ところであなたはいかゞでした、それからあの詩はどうごらんでした。

母 わたしに寄せた詩のことかい、えゝ、まあほんたうにどこの姑だつて、自分の娘の新婚旅行にあんな詩を貰つたためしはないだらう……お前さん、難つ子に血を分けてやるペリカンのことを覚えておいでかい、わたしほんたうに泣きましたよ……

婦 えゝ、はじめはね、でもあとではあなたもあつたけの舞踏をなすつたでせう。ガルダはあなたに向つて嫉妬を起しかけた位でしたよ……

母 まあ、そんなことははじめではなかつたよ。あの子はわたしがお葬ひに黒い着物で出なければならぬといふのさ、でもわたしそれを承知しないのだよ、わたしは子供のいふことを聞か

なければいけないだらうかね。

婦 まあそんな必要はないでせう。ガルダは時々まるで調子が違つてゐることがありますよ、それはわたしがほんの一人の婦人を通りすがりに見たといふだけでね。

母 おや、お前さんたちは幸福ではないのかねえ。

婦 幸福ですと。それは何です。

母 おや／＼。お前さんたちはもう喧嘩をおしなのかい。

婦 もうですと。わたしたちはいひなづけの時分から喧嘩よりほかにしたことはありませんでした……ところでこんどはいよ／＼わたしも退職して、豫備中尉になることになつたのです……どうも妙な話ですが、あれはわたしが軍人をやめて以來、よけいきらひになつたやうに思はれるのです……

母 なぜお前さんは軍服を着ないの。どうもお前さんが平服では、人が違つたやうに思はれてなりませんよ、全く別の人のやうだよ……

婦 わたしは服務の際と演習に軍服を着ればいいのです。

母 着てはいけないのかい。

婦 えゝ、さういふ規定です……

母 とにかくそれではゲルダが可愛さうだね、あの子は陸軍中尉と婚約したのに、それがいざとなると簿記係と結婚をすることになったのだから。

婦 それをどうしようもありますまい、とにかく生きなくてはなりません。それはさうと生きるといへば、商賣の方はどうなつてゐます。

母 正直にいふと、わたしは知らないのさ。でもどうもわたしはフリートリ、ヒがをかしいと思つてゐるのですよ。

婦 どうして。

母 あれは先程よほど妙なことをいひ出したから……

婦 あの馬鹿が……

母 さあその馬鹿が却つて油断がならないのだよ、全體遺言状があるのだかないのだから、貯金だつて……

婦 探したのですか。

母 ありつたけの引き出しを探したのさ……

婦 息子さんのもの。

母 え、え、勿論。そしてあの人の紙屑籠は始終しらべてゐるのだ、手紙を書いては破つて入れ

てゐるからね……

婦 それや何でもないでせう。でも御老人の筆筒は見ましたか。

母 え、無論です。

婦 でも片つばしから丁寧に、残らずの引き出しを。

母 それは残らず。

婦 でもどんな筆筒にも玉手箱のしかけがあるものですよ。

母 それにはわたし考がつかかなかつた。

婦 それではたづねなくてはなりませんまい。

母 い、え、手をつけてはいけない、遺産目録の品物として封印がつけてあるのだから。

婦 その封印は見ない振りには行かないのですか。

母 え、それは駄目ですよ。

婦 しかし後の板をはずしたら。すべて玉手箱は奥にこしらへてあるものだから。

母 それには道具がいるでせう。

婦 あ、いや、その位どうにでも……

母 でもゲルダにはそんなことは知らせてはなるまいよ。

婦 ええ、無論ですとも……それに知ればすぐきやうだいに洩らすでせう……

母 「戸をしめる」しめて置かう。安心が出来るから……

婦 「軍筒の裏側をしらべる」……誰かここへ入つたな、裏側がとれてゐる、……このとほり手が中へ入る……

母 俵の爲わさだ……ほら、どらんさい……どうもくさいと思つたのだ……急いでおしなさいよ、誰か来るから。

婦 ここに書類がある……

母 早くおしなさい、誰か来るから。

婦 封筒が……

母 ダルダが来る、その書類をおよこし、早く。

婦 「大きな手紙をわたす、それを母かくす」さあ。これでいい。

誰か扉を開けようとする。つゞいて叩く音。

婦 なぜ扉に錠をおろしたのです、お互の被滅だ。

母 静かにおし。

婦 あんまり馬鹿々々しい、……お開けなさい……ちやあわたしが開ける……それ。「戸を開ける」

ダルダ 「入つて来る。機嫌を悪くしてゐる」なぜあなた方は錠をかつたの。

母 まあお前さん、先へ挨拶でもおしなさいな。御婚禮からこつち會はないのぢやないか。旅行は面白かつたかい、まあ話をおしよ。そんなむづかしい顔をしてゐないでさ。

ダルダ 「椅子にかける。胸苦しい様子」なぜ扉に錠をかつたの。

母 それはみんながまただん／＼自分勝手になつて来て、うるさく何かいつて来るのを、一々断るのも厄介になつて来たから、ちよつと入つて来られないやうにしましただけさ——そこでさつそくお前さんたちの住居をどういふ風にこしらへるか、考へなくてはなるまいね、無論お前さんたちはここに住むことになるのだらう。

ダルダ 無論さうでせう……でもわたしはどうでもいいのよ。アクセル、あなたはどう思つて。

婦 こゝなら申し分はないだらう、をばさんも悪くはない筈だ……お互によく諒解し合つてゐるのだから……

ダルダ それで一體、かあさんはどこに住むことになるの。

婦 この部屋にね、寢臺を入れさへすればいいのだ。

婦 だつてお前、客間に寢臺は置けまいぢやないか。

ゲルダ 「お前」といふ言葉に耳を止める」わたしのことをおつしやるの。

「お前」をばさんのことだよ……そこでどういふ風にするか……わたしたちはお互に助け合つて行かなければなるまい……そしてをばさんから出るお金で、わたしたちは生活して行くことが出来るさうなものだ……

ゲルダ 「顔色がだん／＼暗れて来る」するとわたし、いくらか暮しの補助をして貰へるわけね。

母 無論さ、お前、でもわたしは洗濯はしないからね。

ゲルダ どうしてそんなことを考へるでせう。まあ何でも内の人をわたしのものだけにして置いて下されば萬事まるく行くのよ。かあさんがこの人の世話をやく必要はないのよ。それを無論あなたはこの人の下宿時代にはしてゐたのね。だから旅行も早く切り上げたのでせう……でも誰だつてこの人を取り上げようとする人は殺されるつもりでするがいいわ。これで皆さん分かつたでせう。

母 それではほかの部屋へ移つて、道具の置きかへをはじめませう。

「じつと母を見る」 よろしい。でもゲルダはここから手をつけて貰はう……

ゲルダ なぜそんなことをするの。わたしはここに一人ぼっち残るのはいやよ……わたしたちはみんな一しよになつてゐるので、やつと安心が出来るのだわ……

母 お前は闇の中で氣味をわるがつてゐるやうだから、それでは三人一しよに行くことにしよう。

三人残らず出て行く。

舞臺空虛になる。風が窓と瀬戸製燈燵の中とで唸つてゐる、後景の扉口はぼたん、ぼたんあほりはじめ、寫字卓から書類がとび出して部屋の中を舞ふ、寫眞が壁から落ちる、搖り椅子がかた／＼動き出す。息子の聲で「かあさん」と呼ぶ聲が聞える、すぐつゞいて「窓をしめて」といふ聲がする。

母。

母 「一枚の紙を手にとって讀みながら、氣遣のやうに駈け出して来る」おや、どうしたのだ。搖り椅子が動いてゐる。

母 「後から入つて来る」何です、何が書いてあります、讀まして下さい、遺言状ですか。

母 扉をしめて。風が来る。いやな匂がするから戸をあけておかなくては。これは遺言状ではないのだよ、俵に宛てた手紙で、中にわたしの悪口が書いてあるのだ。——それからお前さんの悪口が。讀ませて下さい。

母 いゝえ、いやな氣がするばかりだよ、破いてしまはう、これがあの子の手に入らなかつたのは全く爲合せさ……「紙を引き裂いて燈燵の中に投げこむ」

母 あの人は墓の中から起き上がつて物をいふのだ。あの人は死んではゐないのだ、わたしはこの家にゐることは出来ない……あの人はわたしを殺したと書いてゐる……そんなことをわたしはしやしない、あの人は発作を起して倒れたのだ、それはお医者さまが證明してゐる。……それをあの人はまだほかにわけがあるやうにいつてゐる——でもみんな嘘ばかりさ、わたしがあの人を破滅に落したやうにいつてゐるのだ。……まあお前さん、わたしたちはさつそくこの家から出ることにしようよ。わたしにはもう我慢が出来ない、さうする約束をして下さい——おやごらん、あの揺り椅子は。

婦 あれや風だ、風の通り道にあたつてゐるのだ。

母 ここからとび出す工夫をしておくれ。約束するね。

婦 それは出来ませんよ……わたしは遺産が手に入るものと信じ切つてゐたのだ。あなたがそれをほのめかして誘つたものだから。それがなければわたしは結婚はしなかつたらう。かうなればお互になるまゝに委して、行くところまで行くより爲方がない。あなたはわたしをだまされた婚として——そして破産させられた婚として見なければなりません。お互に力を合せて生きて行く工夫をしなければなりません。わたしたちは儉約をしようし、あなたはわたしたちを補助して下さいなくてはなりませんよ。

母 お前さん、わたしが自分の家で女中代りに使はれなければならないといふのかい。そんなことはわたしはいやだよ。

婦 必要はやむを得ない……

母 お前は悪黨だ。

婦 なんだと、女め。

母 お前さんの女中さ。

婦 ちやあこれまでお前さんの女中達がどんな目にあはされてゐたか思ひ知るがいい。あの連中は腹をすかせて、寒さにふるへてゐなければならなかつた、そんなことはお前さんにはさせないよ。

母 わたしには恩給がついてゐるよ……

婦 そればかりのものでは屋根裏の部屋代にも足りない。ここにじつとしてゐればそれでも家賃には足りる……ここにお前さんがじつとしてゐなければわたしは出て行く。

母 ダルダをすてゝかい。お前さんはあの子を愛してはゐないのだね。

婦 それはお前さんの方がよく御存じの筈だ、……お前さんがあれをわたしの心から引つこぬいたのだ。あの女を無理にそとへ押し出したのだ。たゞそれは寢室からではない、そこだけにはあれもゐられるのだ……そしてあれに子供が出来れば、お前さんはそれまで取つて行くだらう。あれ

はまだ何も知らない、何も分からずにいるが、あれもやがて夢遊病の夢からさめるにちがひない。氣をおつけなさい、あれが目を開いたあかつきには。

母 アクセル、わたしたちは一しよにゐなければならぬよ。お互ははなれることは出来ないよ……わたしは一人ぼつちで生きて行くことは出来ないのだ。わたしは大抵のことなら承知するが、たゞあの寝椅子だけは。

婦 でも。わたしはここを寢室になぞして、この住居をめちやめちやにしたいくない。——分かつたでせうね。

母 ではわたしにほかのをこしらへておくれ。……

婦 え、でもその金がありません、あれでけつこうだ。

母 いゝえ、血に穢れた人殺しの椅子だ、屠殺臺だ。

婦 おだまんなさい……それがいやなら、お前さんは屋根裏に一人ぼつちゐるがいい。乞食小屋か、貧民院にゐるがいい。

母 しかたがない、あきらめよう。

婦 それでいいのだ……

問。

母 お前さん、どうだらう、よくもあの人は倅に向つて、自分は殺されて死んだなどと書けたものだねえ。

婦 それは人殺しにもいろ／＼種類はあるからな。……ところでお前さんのやり方は器用なので刑法に觸れないだけだ。

母 わたしたちとおいひなさい。だつてお前さんはあの人をおこらせたり失望させたり、そんなことで人殺しの手傳ひをしたのではないか……

婦 あの人はわたしの行く道に立ち塞がつて、どかうともしなかつたのだ。そこでわたしは突きのけなければならなかつたのだ……

母 たゞ一つわたしがお前さんを恨むことは、せつかくの家庭生活からわたしを誘ひ出したことだ……わたしはあの晩のことは忘れない、そらはじめてお前さんの住居で、みんなすばらしい食卓の御馳走についたらう、あの時表には監獄か氣違病院からか起つたらしい恐しい叫び聲が、植ゑ込みの向うで聞えた……お前さんおぼえてゐるかい、あの聲の主があの人だつたのだ。あの方は煙草畑の上を、あの暗闇と大雨の中に駆けずりまはつて、お上さんと子供を探して猛りたつてゐたのだ……

婦 何だつて今頃それをいひ出すのさ。またどうしてあれがあの人だつたといふことを知つてゐ

るのだ。

六六〇

母 それを手紙に書いてあつたのだよ。

婦 それがわたしたちに何の関係があるか。あの人がつて天使ではないのだ……

母 あゝ、それはなかつたらうが、その代りお前さんよりはもつと人間らしい感情を持てゐたのさ。

婦 いま更同情が戻つて行つたと見える……

母 氣を悪くしないでくれ。お互に和睦して行かなければなるまい。

婦 いやでもね。お互はさういふはめになつてゐるのだ……

奥からしゃがれた叫び聲。

母 あれは何だらう。お前さん、聞いたかい、あの人がよ……

婦 「ぞんざいに」どのあの、人だ。

母 「耳をすます」

婦 あれや誰だらう。——この息子だな、あいつ、また酔つぱらつてゐるのだな。

母 あれがフリートリッピかい、實にあの人にそつくりだ。どうやらこれでは……わたし我慢が出来さうもない。一體あの子はどうしたのだらう。

婦 行つて見てお出でなさい、野郎、きつと酔つぱらつてゐるのだ。

母 お前さん、どうしてそんな口が利けるだらうね、あの子だつてやはりわたしの子供だよ。

婦 さやうさ、やはりお前さんの息子さね。「時計を出す」

母 なぜお前さん、時計を見るの。お前さん、晩の食事にはゐないつもりかえ。

婦 まあごめん蒙りませうよ、どうもわたしはお茶の出がらしに、ぶんと来るひしこやオートミー
ルのお粥ではくださらないから……それに會に出なければなりません……

母 それはどういふ會です。

婦 あなたには何のかゝはりもないことだ。それともお前さん、姑として干涉するつもりですか。

母 するとお前さん、はじめて家へ歸つた晩から、奥さんを一人ぼつち置いて行くのだね。

婦 それもやはりお前さんには関係のないことだ。

母 これでわたしもよもやと思つたことが——わたしと子供たちのためにはじまりかけてゐるのが
分かつたよ。いよく化の皮が現れて來たのだ……

婦 全くそのとおり。

第二幕

六六二

同じ舞臺面。

舞臺の後で音楽——ゴダール作ジュスレンの搖籃の歌。

ゲルダ、寫字卓の前に腰をかけてゐる。

長い間。

息子 「入つて来る」一人つきりなの。

ゲルダ え、おかあさんは臺所でせう。

息子 ちやあアクセルさんは。

ゲルダ 會へ行つたわ……まあフリートリッヒさん、話しておいでよ。わたしのお相手をして頂戴。

息子 「腰をかける」え、僕たちは全くお互ゆつくり話し合ふといふことがなかつたやうですね。

お互は離れてばかりゐて、つい一つ心持になつたこともなかつたやうだ……

ゲルダ お前さんはいつもおとうさんにつくし、わたしはおかあさん方だつたのだ。

息子 今はそれも變つたでせう。——一體あなたはおとうさんといふ人を知つてゐたのですか。

ゲルダ 妙な質問ね。でもわたし全くあの人をおかあさんの目ではかり見てゐたのよ……

息子 でもやはりあの人があたを可愛がつてゐたことはわかつてゐるでせう。

ゲルダ 一體おとうさんは何だつてはじめわたしの婚約を妨げて、あとで許したのでせうね。

息子 それはあなたの夫といふ人を、それだけのたよりになるものと思はなかつたからさ。

ゲルダ そんなことを疑ふから、おかあさんに出て行かれたりしたのだよ。

息子 一體あなたの御亭主がおかあさんをひっぱり出したのですか。

ゲルダ あの人とわたしだわ。まあおとうさんはあれで、わたしを婚約したあの人から引きはなす

つもりで、そのためどんなことになつたか思ひ知つたでせうよ。

息子 それがおとうさんの命を縮めたのさ……それで何でもあなたの思ふまゝにさせてやれと思つたのでせう。

ゲルダ お前さんはおとうさんの傍にゐたのね、何といつてゐて。どうそれを思つてゐて。

息子 おとうさんの苦勞はとていへない位ですよ……

ゲルダ 一體おとうさんはおかあさんのことを何といつてゐたでせう。

息子 それは何も……でも僕はこれ迄いろ／＼見た所では、決して自分は結婚しまいと思つてゐる。間。

息子 ダルダ、あなた幸福なの。

ダルダ え、え。それはあの人と思ふ人を夫にしたのだから、幸福だわ。

息子 なぜあなたの旦那さまははじめての晩から奥さんを一人ぼっち置いて行くの。

ダルダ だつて用ですもの、會があるのですもの。

息子 酒場でね。

ダルダ 何をいふの。お前さん、知つてゐるの。

息子 僕はあなたこそ知つてゐると思つてゐた。

ダルダ 「兩手に顔をおさへて泣く」あ、どうしよう、どうしよう。

息子 ごめんなさいよ、よけいなことをいつて泣かしちまつた。

ダルダ え、つまらないわ、つまらないわ。あ、わたし一そ死んじまひたい。

息子 何だつてもつと旅行をして來なかつたの。

ダルダ あの人は用があるといつてそはくしてゐたのよ、おかあさんのことばかりいつてゐてね、もうおかあさんと一しよでなくては、あの人外へ出てゐられないのよ。

二人はじつと顔を見合せる。

息子 はてね。

間。

息子 面白い旅だつたの。

ダルダ え、え。

息子 ねえさんは氣の毒だよ。

ダルダ お前さん、何だつて。

息子 え、だつてあのとほり、おかあさんはやたら物を知りたがる人でせう、そして電話を誰も出來ないやうな使ひ方をするのだからね。

ダルダ え。おかあさんは探偵をしてゐたの。

息子 それや始終さ……きつといまもどこか戸の蔭に耳をあて、僕たちの話を聞いてゐるよ……

ダルダ お前さんいつもおかあさんのこといふと、悪くばかり考へるのね。

息子 するとあなたはいい方ばかり考へるのだ、どうしてさうなつたのだらう。だつて、あの人がどんな人だか分かつてさうなものだがあ。

ダルダ い、え、またわたし知りたくもないわ……

息子 それはまた別なことさ。あなたは知りたくないといふ。それでも何かしらそこに興味はあるだらう……

ゲルダ まあさ、わたしは眠りながら歩いてゐるのよ。わたしそれは分かつてゐるのよ。でもせつかくの眠りを醒まされたくはないわ。それではわたしもう生きてはゐられなくなるでせう。

息子 全體われ／＼すべて眠りながら歩くものだとは思はないの。——僕は法律をやつてゐるでせう、それで大罪人の判決例などを讀むと、どうしてさういふ罪を犯したか説明の出来ないのがあつて……自分では見つけられて目がさめるまで、あたりまへのことをしてゐると思ひこんでゐるのです。これは夢ではない、むしろ、眠りといふのがほんたうだ。

ゲルダ まあわたしは眠らしておいて頂戴。それは起されるだらうとは知つてゐるわ、でもやはりもつと眠りがつづけばいいと思ふわ。まあ自分で知らないで推量だけしてゐることがどんなにあるでせう。あんた子供の時のことを覚えてゐて、何でもほんたうのことをいふときつと人からいけない子だといはれたものよ……それは何か間違つたことを間違つてゐるとはつきりいふと、きまつて人はわたしに向つてお前は實にいけないといふのです……だからわたし口を利かないことを覚えて、こんどはいい子だといつて可愛がられたわ。かうなると却つて心にもないことをいふことを覚えて、世の中へ出るまでにはまかせてしまつたわ。

息子 「冷淡に」人間は何でもはたのものゝ缺點や弱點をかくしてやらなければならぬ、それはほんたうさ……その次に一步踏みこめばお上手を並べたり、おべんちやらをいつたりすることにな

る……全體どういふ態度をとればいいのか、むづかしい話ですよ……時としてはあけすけにいつてしまふのが道だといふ場合もあるのだからな……

ゲルダ おだまんなさい。

息子 だまりませう。

間。

ゲルダ いゝえ、やはり話して下さい。でもその話はしないでね、わたしあんたの考へてゐることは、だまつてゐる方が却つて分かるのよ……人間が集まるとおしやべりする、もうそれは果てしのないほどおしやべりする、でもそれでよけいその人の考はかくれるばかりですよ……ほんたうに考へてゐることは忘れられるか、心にもない嘘に變つてしまふのよ……他人のことでは何か變つたことを聞き出さう、聞き出さうとして、ほんたうの自分の心持は奥深くかくれてしまふのです。

息子 ねえさんは氣の毒だね。

ゲルダ お前さん、この上なく大きな苦痛といふのは何だと思つて。「間」最上の幸福の破滅を見ることですわ。

息子 やつと物をいひ出しましたね。

ゲルダ 寒いことね、火をこしらへませう。

息子 あなたもやはり寒い。

ゲルダ わたしはいつも寒くて、その上おなかを空かしてゐたものよ。

息子 あなたもね。この家は全く妙だ。

ゲルダ きつとストーブに薪は入つてゐるでせう、おかあさんはよく薪だけ中へ入れといて、わたしたちをごまかしたのよ。

息子 「瀬戸製燧燻の傍へ行つて蓋を開ける」 全くだ、一三本薪が入つてゐる。「問」だがこれは何だらう。——や、手紙だ。引き裂いてある、でもつなぐことが出来さうだ……

ゲルダ フリートリッヒさん、およしなさいよ、きつとまた、果てしもないお小言がはじまるにきまつてゐるから。まあ、来ておかけなさいな、そしておしやべりをしませうよ。

息子 「行つて腰をかける。手紙を自分の傍の卓の上に置く」

問。

ゲルダ ねえ、なぜおとうさんはうちの人をあんなにきらつたのでせう。

息子 あゝ。だつてあなたのアクセルさんは、うちのおとうさんから娘とお上さんを取つて行つたのだもの。おとうさんを一人ぼつちにしたのだもの。その上おとうさんは自分の婿が、自分よりも上等なたべ物を貰つてゐることに気がついたのさ。そしてあなた方はみんな客間にひつこんで、音楽

をやつたり本を讀んだりしてゐたのだ。もうそれは始終うちのおとうさんには薄情な眞似ばかりしてゐたのだ。おとうさんは現在の自分の家庭から壓迫されてゐるやうな、嫌はれものにされてゐるやうな風で……そのためとうとう酒場通ひをするやうになつたのですよ……

ゲルダ わたしたち何をしてゐたか知らなかつたわ……お氣の毒なおとうさん——まあ立派な評判のいい両親を持つてゐるといふことは結構なことなのね、それだとわたしたちどんなにうれしいでせう……あんたおとうさんとおかあさんの銀婚式のことを覚えてゐて。あの時の演説と、それからあの時讀んだ詩のことも。

息子 覚えてゐますとも。でも僕にはあれは道化芝居のやうな氣がしたのです、みんなが夫婦を幸福の標本のやうに祝つたりするのだから、ほんたうは犬の夫婦と同様ぢやないか……

ゲルダ まあ、フリートリッヒ。

息子 だつてほんたうだもの。あなただつて知つてゐるでせう、あの人たちがどんな風に暮して來たか……ほら、おかあさんが窓からとび出さうとして、僕たちがおさへたことを覚えてゐるでせう。

ゲルダ およしなさいよ。

息子 あれには僕たちの知らない原因があるのだよ。あの別居の間、僕はおとうさんについてゐたものだから、おとうさんは度々話したさうにしてゐたが、やはり言葉が唇から外へ出て來なかつ

た……僕は度々おとうさんの夢を見る……

六七〇

ゲルダ それはわたしも見るわ。わたし夢でおとうさんを見る時は三十位の年輩なのよ……おとうさんはなつかしさうにわたしの顔を見て、何かいひたさうなだけけれど、でもどういふことを思つておいでなのかわたし分からないのよ……よくおかあさんも傍にいらつしやることがあるわ。おとうさんはおかあさんに對して機嫌悪くしてはいらつしやらない、何があつてもやはりおかあさんを愛していらつしやるやうなのよ。最後までおかあさんを愛してはいらしつたのね。あんた覚えてゐて、銀婚式の時おとうさんはどんなにやさしい言葉でおかあさんに話しかけてゐたでせう、どんなに心からお禮をいつてゐたでせう、それは何があつてもね、それは何があつてもね……

息子 何があつてもね。随分いつていいことは澤山あるくせに、いはなすぎた……

ゲルダ でもあれはいいことですわ。おかあさんだつてやはり立派な功績はあるのだもの……家のことはよく面倒を見たものですよ。

息子 さあ、それは随分疑問だなあ。

ゲルダ 何だつてそんなことをいふの。

息子 そら、早速お前さんたちはかういふことになるかと團結する。何でも家政のことに觸れて來るとあなた方は一つ味方に馳せ參するのだ……それはまるで共済組合か秘密結社か何ぞのやうな具合

なのだ……僕は仲よしのグレーテばあさんに、家の經濟を聞いたことがある。なぜこの家では誰も決して満腹するといふことがないだらうと僕がたづねると……あのおしやべりな女がだまつてしまふのだ。だまりこんだ上に機嫌を悪くするのだ……ねえさんにはこのわけが分かりますか。

ゲルダ 「短く」いゝえ。

息子 だつてねえさんもやはり共済組合の仲間だといふことですよ。

ゲルダ わたしお前さんのいふ意味が分からないわ。

息子 よく僕は疑ふことだが、おとうさんはこの共済組合か秘密結社の犠牲に上げられたのではな

いか知ら、おとうさんは無論見つけて知つてゐたには違ひない。

ゲルダ 時々お前さんは突拍子もないことをいふ人ねえ……

息子 僕はおとうさんがその秘密結社といふ言葉をよく冗談に使つてゐたことを思ひ出す。でもおしまひにはだまつてしまつたが……

ゲルダ まあこの部屋はたまらなく寒いこと、墓穴の中のやうだわ……

息子 ちやあこれを焚きつけにしよう、いくらかの足しになりさうなものだ。「引き裂いた手紙を取り上げる、最初は何の考もなしにそのまま持つて行かうとして目が止まつて、讀みはじめ」おや、何だ。――

「問」我が子よとある……おとうさんの手跡らしい。「問」ちやあ僕に宛てたのだ。「讀む。一脚の楯

子にべつたり腰を落して、小聲で讀みつゞける」

ゲルダ お前さん、何を讀んでゐるの、何なの、それは。

息子 悲しいことだ。

間。

息子 實にたまらないことだ。

間。

ゲルダ 何だかおつしやいよ。

間。

息子 これやあんまりひどすぎる……〔ゲルダに向ひ〕亡くなつたおとうさんから僕に宛てた手紙ですよ。〔先を讀む〕さあこれで僕は目が醒めた。〔寝椅子の上に突ツ伏して、苦痛のうめき聲を立てる。手紙はしかしかくしの中に押し込んでしまふ〕

ゲルダ 「きやうだいの傍に膝まづく」どうしたのさ、フリートリ、と、何だかおつしやいよ。ねえあんた、かげんが悪いの。まあおつしやいよね。

息子 「起き上がる」僕はもう生きてはゐられない。

ゲルダ まあお話しなさいよ。

息子 とてもあり得べからざることだ。〔身づくろひして立ち上がる〕

ゲルダ だつてほんたうのこととは限らないでせう。

息子 「憤慨して」何をいふのだ。おとうさんは墓穴の中から嘘をつかうか……

ゲルダ だつて病的な想像に憑かれて物をいはないとも限らないわ……

息子 祕密結社め。またそんなことをいふ。ちやあ話して上げよう。お聞きなさい。

ゲルダ わたしもう聞くだけのことはみんな聞いてゐるつもりよ、たゞそれをほんたうにしないだけだわ。

息子 ほんたうにしまいとするのだ。——じつはかういふことなのだ。われ／＼を生んでくれたあの人は、どろぼうであつたのだ。

ゲルダ まさか。

息子 あの人はうちの金をぬすんだのだ。帳面をごまかしたのだ。一番下等な品を一番高い値段で買ったのだ。自分は晝前臺所でたべておいて、われ／＼には水を割つたものや、あたため返しをくれたのだ。牛乳といへば滋養分は自分が取つてしまつたのだ……だからわれ／＼子供は十分に發育しなかつたのだ。始終病勝ちで腹をすかしてゐたのだ。あの人は炭薪の代までぬすんでゐた。それがためわれ／＼は始終寒い思をした。おとうさんがそれを見つけて叱ると、あの人は直しま

すと誓ひながら、やはりもとのとほりやつてゐた。新手の逃げ道をこしらへた、醤油と胡椒でこまかすやうな。

ゲルダ とても一言だつて信じられないわ。

息子 ほら秘密結社が。——ところでここに一番ひどい事實が残つてゐる、あの悪黨は、あなたの旦那さまだが、ねえゲルダ、あいつはあなたのことを何とも思つてゐやしない、あなたのおかあさんを愛してゐるのだ。

ゲルダ まあ。

息子 おとうさんがそれを見つけると、そしてあなたの旦那がおかあさんから金を借りてゐることが分かる、あの悪黨は自分の悪事をこまかすために、お前さんに結婚を申し込んだのだ。これは大筋で、あとの細かいことはあなたが自分で考へられよう。

ゲルダ 「ハンケチに顔をうづめて泣く」それはわたしとうに知つてゐたのよ、でもやはりわたし知らなかつた……わたしの意識にまではつきりとは來なかつた、だつてあんまりなことでも。

息子 さあ、ここであなたを恥辱から救ひ出す道はどうすればいいだらう。

ゲルダ 遠い／＼所へ行つてしまふのよ。

息子 どこへ。

ゲルダ 知らないわ。

息子 ちやあしばらく待つてどうこの問題が進んで行くか見てみよう。

ゲルダ だつておかあさんに對しては手向ひは出來ないわ、おかあさんは謂はゞ神聖な……

息子 何くそ、神聖が聞いてあきれれる。

ゲルダ そんなことをいふものではないわ。

息子 あの人はけものゝやうに狡猾だけれど、自惚れのために時々目がくらむことがある……

ゲルダ 逃げませうよ。

息子 どこへ。どうして、あの悪黨をあの人がこの家から追ひ出すまでがんばるさ。——しいツ、そこへ悪黨が歸つて來た。しいツ。——さあゲルダ、こんどは僕たち二人で共済組合をつくるのだ。僕はあなたに言葉を上げよう、合言葉をね。それは、「あいつは婚禮の晩にあなたをぶつた。」といふことだ。

ゲルダ わたしに時々思ひ出させてね。それでないと忘れるわ。わたしほんたうに忘れてしまひたいわ。

息子 お互の生活は滅びてしまつた、……何一つ愛惜の残るものはなくなつた。仰いで見る値うちのあるものがなくなつたのだ……この上はたゞ爲返しをするだけだ、おとうさんの思ひ出を聖め

るだけにお互は生きて行くのだ。

ゲルダ　そして正義を行ふために。

息子　いや復讐といふがら。

婦　「入つて来る」

ゲルダ　「とぼけて」お歸んなさいまし、會は面白うございまして。何かいい話がございまして。

婦　あれは延びたよ。

ゲルダ　もうおやめですか。

婦　延びたといつたのだ。

ゲルダ　まあ、するとこれから家のことを御相談願へますか。

婦　お前は今夜大分面白さうだな。なるほどフリートリッピとならいいお相手だらう。

ゲルダ　わたしたちは共済組合をして遊んでゐたのですよ。

婦　馬鹿なことをいふな。

息子　それから秘密結社ごつこをね。いや、ヴェンデッタ(復讐)の積古をね。

婦　「不快に感じて」お前たちは妙なことをいふな、一體何のつもりなのだ。何か秘密があるな。

ゲルダ　あなたこそ御自分の秘密を話しては下さらなくつて。それともやはり多分あなたには秘密

なんぞおありにならないわね。

婦　どうしたといふのだ、誰か來たの。

息子　ゲルダと僕は千里眼になつたのですよ。僕たちは遊離した靈魂の訪問を受けたのです。

婦　お互に冗談のつもりで聞いてゐるが、さうでないといふことはないぞ。ゲルダ、どうやらお前は快活らしく装つてゐるのだな。大體お前は不機嫌な女なのだ……「妻の頬に觸らうとする、女はつとあとじさりする」

婦　お前、わたしがこはいのか。

ゲルダ　「輕蔑するやうに」どういたしまして。なるほど恐怖に似たやうな感じですけどやはり違ひます。顔付よりもよけい様子は物をいひます。身振や物言ひのかくしきれないことを言葉はかくします。

婦　「ぎよつとして、書棚の傍に立ち竦む」

息子　「揺り椅子から立ち上がる、そのあとで椅子は世の入つて来るまで揺れてゐる」さあおかあさんが、オートミールのお粥を持つてお出でだ。

婦　何を……

母 「入つて来る、揺り椅子が揺れてゐるのを見てぎよつとする、でもしばらくして落ち着く」さあみんな来てお粥をたべないかい。

婿 いやまつびら。燕麦なら獵犬でもゐたらおやんなさい。だがライ麥の粉ならおできにつける藥ださうだ……

母 うちは貧乏だから儉約をしなくてはね……

婿 二萬クローネも入る貧乏人もないものだ。

息子 でも返す氣遣ひのない相手に貸してしまへばね。

婿 何だと、この息子はどうかしてゐるのか。

息子 とうにどうかしてゐるのさ。

母 お前さんたち、さあお出でな。

ゲルダ さあ行きませうよ。みなさん、元氣をお出しなさい、わたしがピフテキをこちさうして上げるわ……

母 お前さんが。

ゲルダ え、わたしが、わたしの家でね……

母 妙なことをいふね。

ゲルダ 「扉口の方へ思ひ入れをして」 さあ、どうぞみなさん。

婿 「母に」 どうかしたのですか。

母 良だよ。

婿 わたしもさう思ふ。

ゲルダ さあ、みなさん。

一同扉口の方へ行く。

母 「婿に」 お前さん、揺り椅子がひとりでに動くところを見たかい。あの人の揺り椅子が。いいや、それは見なかつた。しかしほかのことをわたしは見てゐるのだ。

第三幕

六八〇

同じ舞臺面。

舞臺の後でウォルフ・フェルナリ作のワルツ曲「彼は語りぬ。」をひいてゐる。

ゲルダ 「本を讀んでゐる」

母 「入つて来る」 お前さん、あれを知つてゐるかい。

ゲルダ ワルツですか、ええ。

母 お前さんの御婚禮の時のワルツだよ、あれをわたしは朝まで踊つたのだ。

ゲルダ わたしが。——うちの人はどこへ行きました。

母 わたしがどうしてそれを知つてゐよう。

ゲルダ おやさう、あなた方はもう喧嘩をなすつたの。

間。お互に思ひ入れ。

母 お前さん、何を讀んでゐるの。

ゲルダ お料理の本よ。でもなぜこの本には何かをどれだけの時間煮るといふことが書いてないの

でせう。

母 「困つて」だつてお前さん、それはいろ／＼だもの、人によつて好みは違ふし、一人がかうといへば一人はあゝだといふし……

ゲルダ それがわたし分らないわ。御馳走は何でも手早く出さなければ、さめてまづくなつてしまふでせう。例へばこなひだも、あなたは山鳥を三時間も焼いたでせう。はじめの一時間はこの家中すばらしいいい香がしましたわ。それから臺所が静かになつてしまつて、さていよく御馳走が出る時分には、香りはみんなぬけて、味も香もなくなつてゐましたわ、あれはどういふわけ。

母 「困つて」そんなことは分らないよ。

ゲルダ それからなぜソースがある筈なのになくなつてゐるの、誰がつかつてしまつたのですか。

母 わたしには一向分らないよ。

ゲルダ でもいまわたし本を讀んでみて、いろ／＼なことを知りましたわ……

母 「中途で遮る」その位なことはわたしみんな知つてゐる、何もをしへてくれるには及ばないよ。

その代りわたしがお前さんに、家事のくり廻し方をしへて上げよう……

ゲルダ 醤油や胡椒の使ひ方ですか。それはわたしもう分かつてゐます。そしてお客さまには、何でも誰もたべないやうなものを選んで出して、それをあくる日まで持ち越させるやうにするので

せう……さもないければお客を呼んでおいて、食堂で薄い味も香もないスープだけでごめん蒙るところとでせう……そんなことはわたし残らず知つてゐるのですよ、だからわたしけふから家事をとりしきつてやらうと思ひます。

母 「むつとして」 わたしがお前さんの女中になるわけかい。

ゲルダ わたしがあなたの女中になるし、あなたもわたしの女中になるのよ。さうしてお互助け合つて行きませう。……さあ、いらした。

婿 「出て来る、太い杖を手に持つてゐる」 さて。寝椅子はどうしました。

母 まあ、あれは……

婿 「おどすやうに」 うまく行かないのですか。どこか具合が悪いのですか。

母 あゝ、やつと今わたし分かつて来た。

婿 すると。……さてわれ／＼はこの家では満腹することが出来さうもないから、ゲルダと二人だけは別にたべます。

母 そしてわたしは。

婿 あなたは樽のやうに肥つてゐるのだから、その上たんとはいりますまい。あなたはどちらかと

いへばわれ／＼同様いくらか痩せた方が健康のためにはいいに違ひない……それはとにかく——おいゲルダ、お前はちよつとあちらへ行つておいで。——とにかくストーブをたいしてもらひたいものです。

ゲルダ出て行く。

母 「怒りにふるへる」 ストーブの中に薪が入つてゐるよ……

婿 いゝや、ほんの二三本木ツきれがあるだけだ。ストーブが一ぱいになるだけの薪をはふりこんで下さい。

母 「躊躇する」 お金を燃してしまふ法がありますか。

婿 いゝや、だが温くするには薪を燃さなくてはなりません。早くして下さい。

母 「躊躇する」

婿 一、二、——三。「杖で卓の上を打つ」

母 もう一本も薪はなかつた筈だ……

婿 あなたは嘘をつくか、金をぬすんでゐるのだ……ついこなひだ一クラフテルの薪を買つたばかりだ。

母 いまお前さんがどういふ人だか分かつた……

婦 「揺り椅子にかけろ」 その位なこととはどうに分かつてゐた筈だ。……さあ早く薪を持って來なさい、ぐづぐづすると……〔杖を振り上げる〕

母 「出て行く。直ぐ薪を持って歸つて來る」

婦 さあ、こんどはそんな見せかけの火でなく、ほんたうの火を焚いて貰ひたい。一、二、三。

母 まあお前さんは、うちのおぢいさんに似て來たこと。さうしてあの人の揺り椅子にかけてゐるところは。

婦 たきつけなさい。

母 「おどかさされてびくびくしながら、それでもおこつた調子で」するといつたらしますよ。

婦 それでは火を見てゐて下さい、わたしたちは食事をして來るから……

母 ぢやあわたしは何をたべよう。

婦 オートミールのお粥をゲルダが臺所へこしらへて置いた筈だ。

母 クリームのない青ミルクとね……

婦 あなたがクリームをすくひとつてしまつたのだから爲方がない。

母 「むつとした調子」 それではわたしはわたしで勝手にする。

婦 そんなことは出來ませんよ、わたしはあなたをしめ込んで置くのだ。

母 「咳く」 そんならわたしは窓からとびおる。

婦 まあやつてごらん。それをあなたはとうにやる筈であつたのだ。それをしてくれれば四人の人間の命が助かるところであつたのだ——さあ然しつけなさい。——火を吹くのだ——そのとほり——それではわたしが歸るまでそこに坐つてゐるのですよ。「出て行く」

問。

母 「最初揺り椅子をおさへる、それから扉口によつて耳をすます。さてストーブから二三本薪を取り出して、それを揺り椅子の下にかくす」

息子 「入つて來る、少し酒を飲んでゐる」

母 「ぎよつとする」 お前さんかい。

息子 「揺り椅子にかけろ」 さうです。

母 どんな具合だえ。

息子 いけません、僕はもう間もなくおしまひだ。

母 それはほんの妄想だよ——そんなにお揺りでない。わたしをごらん、わたしは可なりな年になつてゐたが……それでもわたしは子供たちに對する義務ははたしたし、随分爲事もしたものだ。

さうではなかつたかえ。

六八六

息子 いやはや。——そしてこのペリカンは、ついぞ子供のために心臓の血を分けてはくれなかつたのです。動物學に書いてあることは、あれは嘘ですね。

母 お前さん、何か面白く思はないことがあるのかい、いつてごらん。

息子 ちやおかあさん、聞いて下さい。僕はしらふでゐると、どうも正直に物をいふことが出来ない、思ひきつていふ氣力がありません。しかし今は僕もすん／＼いふつもりだ、おとうさんの手紙も読みましたよ、あなたがぬすんでストロブの中に投げこんで置いた手紙をね……

母 何だつて。どんな手紙さ。

息子 相變らず嘘をつきますね、僕は覚えてゐる、あなたがはじめて僕に嘘をつくことをどういふ風にしてをしへたか、僕はそれをいふに忍びない。覚えてゐますか。

母 いゝえ、覚えてなんかありませんよ。さうお揺りでない。

息子 それからはじめてわたしにどういふ風に嘘をついたでせう——僕は子供の時のことを覚えてゐる。僕はピアノの下にかくれてゐたのだ、するとおばさんがあなたをたづねてやつて來た。そのおばさんを相手にあなたは三時間も嘘話をした、それを僕は聞いてゐなければならなかつた。

母 それこそ嘘だ。

息子 でもあなたはなぜ僕がこれほど不幸なのか知つてゐますか。僕はかつて母親の懐といふものを知らなかつたのです、子守の娘が牛乳の瓶をあてがつてくれてゐたのです。僕は大きくなつてから、この娘に連れられてその娘のきやうだいのところへ行きました。そのきやうだいといふのは娼婦であつたのですね。そこで僕は秘密な場面に度々ではなればなりませんでしたが、まあさういふ場面は普段なら春か秋往來で飼犬の主人が、子供たちに見せてくれるやうなものですよ。それを僕があなたにお話すると——その時僕は四つでしたが——その罪惡の巢で見たとほりをお話すると、あなたは嘘をつくといつて僕をぶちましたね、そのくせ僕はありのままを話したのですよ。あなたのお目がねにかなつてつけられたその女中は、僕が五つになつた時、その罪惡の秘密の帷を僕のために開けて見せてくれたのです、僕は五つの時でした。「すゝり泣きをする」

問。

息子 その後僕はおとうさんやゲルダと同様おなかをすかしたり寒さにふるへたりすることになりました。ところでいまはじめて僕は、あなたが家内の雑用や燃料のお金をくすねてゐたことを知つたのです……まあペリカン、僕をごらんなさい。あのゲルダをごらんなさい、あの人にはまるつきり胸廓らしいものがないのですよ——どうしてあなたがおとうさんを殺したか、自分に覺えがあるでせう。あなたはあの人を絶望の極に追ひ込んだのです。たるほどそれだけでは法律上には

火 箱

六八七

處罰されないでせう、あなたがわたしのきやうだいをどういふ風に殺したか、それも一番よく知つてゐるのはあなたです、でも今ではあの人も知つてゐますがね。

母 お揺りでない。——何をあの子が知つてゐよう。

息子 あなたの知つてゐるだけを、しかしわたしはいひ得ないのです。「すゝり泣く」これだけのことをいふのも恐しい氣がします。けれども僕はいはなければならなかつた。僕には感情がありません、僕はしらふになれば自殺します。だから僕は酒に酔つて來たのです、とてもしらふでどうする勇氣もありませんでした……

母 いくらでも嘘をおつきなさい。

息子 おとうさんは或憤慨のあまり、あなたは生れついてたゞ一つの嘘のかたまりのやうなものでいつたことがありました……あなたはほかの子供のやうなことはないひ習はないで、すぐ嘘をついたものださうですね……あなたは始終つとめをよそにして、自分の楽しみに耽つてゐたものですね。それで僕は思ひ出します、ゲルダが重い病にかゝつた時、あなたはあの晩オペレットを見に行つたでせう。僕はいまでもあなたのいつた言葉を覚えてゐます、「人間の世は随分苦しいものなのだ。それをよけい苦しくするにはあたらなさい。」とね……

問。

息子 それから夏、あなたが三月の間おとうさんとバリーに行つておいでの時、あなたは随分面白い目をごらんになつた代りに、僕たちは借金に苦しめられ、ねえさんと僕はこの町で暮して、二人の女中とこの家の中に押しこめられてゐたのです。お二人の寢部屋には、消防夫が小間使としよにゐて、御夫婦の寢床は神聖な一組に使はれてゐたのです……

母 なぜお前さんはそれをせんに話さなかつたのだ。

息子 僕が話したのをあなたは忘れたのでせう。僕はお蔭で告げ口をするとか、嘘をつくとか代りばんこにいはれて、ぶたれたものですよ。何しろあなたは、ほんたうの話を聞けば、すべて嘘だといひたがる人でしたからね。

母 「囚へられた野獣のやうに、部屋の隅々を歩きまはる」 まあ息子たるものがそんなことを母親に向つていつたためしをわたしは知らないよ。

息子 なるほどこれは當り前ではありません、まづたく自然に背いてゐます。それは僕もよく知つてゐます、でも一度はいはないわけには行かないのです。あなたは眠りながら歩いてゐるやうなもので、目をさますことができなかったのです。従つてあなたは自分をほかにどう變へようもなかつたのでせう。おとうさんがいひましたつけ、あなたといふ人は拷問にかけられても、自分がこれ／＼のことをしましたとか、嘘をつきましたとか、白狀をすることはないだらうとね……

火

箱

母 おとうさんだと。お前はあの人に過失がなかつたと思ふのかい。

息子 あの人は大きな過失がありました、でも妻子に對してはなかつた人ですよ。——ところがあなたが夫婦の間にはほかの秘密があるのです、それを僕は臆測をして見たり、疑惑を抱いてみたり、そのくせいひ出す氣にはなれなかつたものです……この秘密が、おとうさんを墓場へ送るのに少くとも一部の原因にはなつたのですよ。

母 お前さん、それでしゃべりたいだけしゃべつたのかい。

息子 これで僕は行つて飲んで來ます……僕はもうとても試験など受ける氣にはなれません。裁判などといふものゝ價値を信じません。法律はどろばうや人殺しのためにつくられたとしか思はれません。罪人に勝手な熱をふかせるためのものとしか思はれません。物の真相なんといふものは證明することの出来るものではなく、その代り偽證者が一人揃へば完全な證據になるのです。十一時半頃まではわたしの主張は正しいのです、それが十二時すぎには權利がなくなるのですね。誤記一つあつても、欄外の書入一つ間違つても、無實の罪で牢へやられかねないので。僕がわるものに對して情を加へれば、そいつはきつとよけいな同情に對して僕を處罰させようとするでせう。人生なり、人間なり、社會なり、そして僕自身なりに對する輕蔑の情は、かうなるともう限りなく起つて來て、とてもこの上無理にも生きて行く空はなくなり……〔扉口へ行く〕

母 行つてはいけない。

息子 あなたは一人でこはいのですか。

母 わたしは神経が強くなつてゐるのだ。

息子 その筈でせうよ。

母 それにこの椅子が實にへんな氣を起させるのだ。始終そこにあの人がかけてゐた時分、肉切庖丁が二本そこに突ツ立つてゐるやうに思はれた……それがわたしの心臓を切りきざむのだ。

息子 だつてあなたはどうもされやしなかつた。

母 行かないでくれ。わたしはここにこのまゝゐられない、アクセルは悪ものだよ。

息子 それは僕もこれまで始終思つてゐたことです。けれど今となつては、あの人もやはりあなたの犯罪的な性癖の犠牲になつたのだと思つてゐます……さうです、あの人もやはり誘惑された青年であつたのです。

母 お前さんは悪い仲間に入つてはいけませんよ。

息子 悪い仲間ですと。まあ僕はついいい仲間にあつたことなどはなかつたのですよ。

母 お行きでないよ。

息子 僕はここにゐて何が出来るでせう。僕はいたづらにあなたを言葉で死ぬほど苦しめるだけの

ことです……

母 お行きでないよ。

息子 あなたは目を醒まさうといふのですか。

母 さうだ、いまわたしは長い／＼眠りから醒めたやうなのだよ。恐しいことだ。なぜもつと前に醒めなかつたらうね。

息子 誰にも出来ないことはやはり出来ません。そして、して出来ないことだとすれば、それはほとんどあなたのせゐではないともいへませう。

母 その言葉をもう一ぺんいつておくれ。

息子 あなたはほかにきつと爲様がなかつたのでせう。

母 「奴隷のやうに息子の手を援助する」もつといつておくれ。

息子 もういけません。——しかし僕はあなたに願ひしたい、このまゝここにゐて、悪い上によくい悪くしないやうにして下さい。

母 お前のいふとほりだ、わたしは行きませう。

息子 氣の毒な人だ。

母 お前、わたしに同情してくれるのかい。

息子 「すゝり泣く」さうです、無論同情しますとも。僕は何度あなたのことをかういつたでせう、

「あの人はじつにいちの悪い人だ、全く氣の毒になる位いちの悪い人だ。」とね。

母 有難う。——それでは行つとくれ、フリートリッピ。

息子 それを直すことは出来ませんか。

母 あゝ、これは直らないよ。

息子 なるほど、さうですか。——これは直らないか。「出て行く」

母一人残る。しばらく胸の上に腕を組んでだまつてゐる、さて窓際まで行つて、窓を開けて下をのぞく。また部屋の中へ戻つて、とび出さうとする様子をみる。しかしまた思ひ返した時、三度後景の扉を叩く音がする。

母 誰だい。「窓をしめる」おはいり。

後景の扉が自ら開く。

母 誰かゐるの。

息子ほかの部屋で寝てゐる。

母 あれはあの人だ、煙草煙のあの聲だ、あの方は死んだのではないのか。わたしどうしよう。ど

こへ逃げよう。「籠笥の後へかくれる」

また前のやうに風がおこる、書類がとび散る。

母 窓をおしめ、フリートリッピ。

花の頭が吹き折られる。

母 窓をおしめ、わたしは凍え死にさうだ。ストーブの火は消えてゐる。

残らずの電燈を点す、戸をしめる、すぐ風で煽られる。揺り椅子は風のために始終運動し續ける。彼女は部屋の隅々を歩きまはつて、とうとう、揺り椅子の前まで来て突ツ伏すと、顔をクッションに埋めてしまふ。

ゲルダ 「入つて来る。ひきわり夢のお粥を入れた盆を手にとって来てすゝめる、それから一つだけ残して残らずの電燈を消す」

ワルツ曲「彼は語りぬ。」がひかれる。

母 「はつとして起き上がる」 お消しでない。

ゲルダ だつて儉約はしなくてはなりません。

母 お前さん、もうお歸りかい。

ゲルダ え、あの人あなたがおいでにならないとつまらないのですつて。

母 どうも有難う。

ゲルダ さあ、あなたの御馳走を持つて来ました、

母 わたしはおなかが空かないよ。

ゲルダ たあにあなたは空いてゐるのさ。でもオートミールのお粥をたべないのでせう。

母 どうして度々たべてゐる。

ゲルダ いゝえ、一度だつてたべはしないのよ。でもお粥がいけないのではない、あなたが犬にやるつもりでこしらへた麥のお粥を、わたしたちにたべさせて、いやな顔をするところを見て笑ふその底意地悪い笑ひ顔がいけないのよ。

母 わたしは青い牛乳などは飲めない、そんなものを飲めば寒くなる。

ゲルダ だつてあなたが朝のコーフィーにクリームはしやくつて飲んでしまつたのでせう。ぜひ飲んでいただきたいわ。——「お粥を小卓の上にのせる」お上がんなさい、拜見するわ。

母 わたしはごめんだ。

ゲルダ 「腰をかゝめて揺り椅子の下の薪をひっぱり出す」あなたは召しあがらなければ、わたしアクセルにいきますよ、薪をくすねて置いたことを。

母 アクセルに。あの人はわたしと一しよにゐないと寂しがる男だ……あの人はわたしに決してい

「やなことはしなかつた。お前さん、婚禮の時を覚えてゐるかい、あの人はわたしと踊つたらう……」

母 「彼は語りぬ。」の曲でね。それがいま聞えてゐる。「この時弾かれてゐる第二節を口ずさむ」

ゲルダ そんな恥づかしい話を思ひ出させない方が、あなたのおためです。

母 それからわたしは詩ときれいな花を貰つたのだ。

ゲルダ おだまんなさい。

母 わたし、あの詩をうたつて聞かしてあげようか。わたしは空で覚えてゐるのだよ。

「ギンニスタンにて……」

ギンニスタンといふのは天國の樂園をベルン語でいつたものだ、その樂園に神聖な芳香仙女のベリスが住んでゐるのだ……ベリスといふのはまあ神女とか妖女とかいふもので、長く生きれば生きるほど、よけい若くなるといふ不思議な靈能を持つてゐるのだよ……

ゲルダ おや／＼まあ、あなたは御自分がベリスのつもりなのですか。

母 さうさ、さう時に書いてあるのも。だからヴィクトルをちさんも、わたしのことだといつてゐた。そこでわたしがまた結婚したら、お前さんたちはどう思ふ。

ゲルダ 氣の毒な人ねえ、あなたは、あなたはまだ眠つたまゝで動き出せないのね。どうしても醒めないのせうか。みんながあなたのことを笑つてゐるのが見えないの。アクセルがあなたをから

かつてゐるのが分からないの。

母 あの人が。どうしてあの人はいつだつてわたしに對しては、お前さんなぞに對するよりもずつと禮儀正しいのさ。

ゲルダ あの人が、あなたに向つて大杖をふり上げてでもですか。

母 わたしにですと。あれはお前にふり上げたのだ。

ゲルダ まあ／＼おかあさん、あなたは理性を失つてしまつたのね。

母 あの人はなるほど今夜わたしと一しよでなかつたので、さぞつまらなかつたらう。わたしたちはいつもそれは澤山話があるのだからね。あの人はたゞ一人わたしを理解してくれるのだ。お前さんなどはほんの子供さ……

ゲルダ 「母の肩をつかんでゆすぶる」どうぞ後生ですから、目をさまして下さいよ。

母 お前さんこそほんたうに目がさめてゐないのだ、けれどわたしは母親だ、わたしの血でお前さんを育てたのだ……

ゲルダ いゝえ、あなたはわたしの口に、ゴムの吸ひ口をあてがつて瓶の牛乳を吸はせたのです。その後わたしは戸棚へ出かけて行つては、つまみ食ひをしなければなりません。でもそこには堅いライ麦のパンしかなかつたので、わたしはそれに芥子をつけてたべたものです。それで襟もと

迄かつかとして来ると、酢甕で顔を冷したものです。お皿とパン籃がわたしの食堂だったのです。母なるほど、お前さんはもう子供の時からどろばうをしたのだね。結構な話だ。しかもそれをばづかしくもなくいふのだね。そんな子供のためにわたしは自分を犠牲にして来たのだ。

ゲルダ「泣く」どんなことでもわたしあなたに許して上げるつもりです。でもあなたがわたしの命を奪ひ取ったことだけは許せません。ええ、あの人はわたしの命でした、あの人と一しよになつて、わたしははじめて生きる楽しみを知つたのです……

母 どうもあの人がわたしを大事にしてくれるといつて、わたしの知つたことではないよ。多分あの人はさあ、何といはうか、きつとわたしの方を——よけい好いてゐるのだらう……まああの人はお前さんのおとうさんよりは、よつほど上等な趣味を持つてゐるのさ、おとうさんといふ人は競争相手が出来るまでは、わたしの値うちが分からなかつた人だからね。

三度扉を叩く音。

母 誰が扉を叩くのだい。

ゲルダ おとうさんのことを悪くいふものではないわ。わたしおとうさんに對して犯した罪を補ふには、一生かゝつても足りないやうな氣がしますわ。でもあなたに科はあるのです、わたしをおとうさんに背かせたのはあなたですもの。覺えていらつしやらなくつて、わたしは子供の時分あな

たはわたしに、わたしのちつとも分らない下等な悪口の言葉ををしへて下さいましたね。おとうさんは随分物のわかつた方だつたから、わたしがどんな毒矢を放しても、それを叱らうとはなさらなかつた、だつてその矢を弓につがへてくれた當人をおとうさんは知つてゐたのですもの。あなた覺えてゐますか、あなたはわたしをしへておとうさんに嘘をつかせましたね。わたしが學校で新しく要る本が出来る、あなたとわたしとぐるになつて、お金をおとうさんから取つて分けたでせう——どうしてわたしこれだけの昔話を忘れることが出来ませう。何か命を取らずに、記憶だけを消す藥がない限りはね。まあどうかしてわたしに、世の中を思ひ切る氣力があつたらいいと思ふわ。でもわたしはフリートリ、と同様に、力もない、意志もない犠牲です、あなたの犠牲です……無感覺な人ね、當のあなたは却つて御自分の悪業のために一向苦しんではゐないのです。

母 お前わたしの子供の時を知つておいでかい。まあどんなにひどい家庭にわたしは育つたことだらう。どんなに悪いことをわたしはそこで覺えたらう。さういふことは遺傳するものださうだが、でも誰から傳はつたものだらう。最初の兩親のことは子供の時分よんだ本に書いてあつた。なるほどあのとほりなのかも知れない……だからわたしを責めておくれでない、さうすればわたしもわたしの兩親を責めないだらうし、その兩親もまたその前の兩親を責めることは出来ないから、まあそんな風にしてどこまでもはてしはないのだよ。それにかういふことはどの家にもあることだ。

たゞ表に現れないだけのことなのだ。……

七〇〇

ゲルダ さういふことだと、わたしもう生きてゐたくない。わたしもやはりいやでもさういふはめに
なるものなら、わたしいつそつんぼのめくらでこの情ない世の中を通つて行きたいわ、そしてこ
の世の後の一そうましました世の中にせめて希望をかけて、生きて行くよりほかはないわ……

母 どうもお前は恐しく物に感じやすくなつてゐるね、まあ、ゲルダや、お前さんも子供が出来れ
ば、またほかのことを思ふやうになるでせう……

ゲルダ わたし子供なんか出来ません……

母 どうして分かります。

ゲルダ お医者さまがさう宣告したのです。

母 それは思ひちがひだ……

ゲルダ ほら、またあなたは嘘をつきますね……わたしは子供が生めないのですよ、發育が十分で
ないので、それはわたしもフリートリッヒも同様です、だからわたし生きようとは思ひませ
ん……

母 何をくだらないことをいふのだねえ……

ゲルダ わたしいつそ思ひきつてしまふの悪いことが出来るものなら、あなたといふものをい

つそ亡くしてしまひたいのだ。どうして悪事をするといふことはこんなにむづかしいのでせう。
わたしあなたに向つて手を上げようとすれば、却つてわたし自分を打つことになるでせう……

共同住宅の音楽がふと止む。息子また唸る。

母 あの人はまたお酒を飲んでゐるね。

ゲルダ フリートリッヒも可哀さうよ、ほんたうにあの人も何をしていいのか分からないのだわ。

息子 「出て来る。ほとんど泥酔して、吃りながら」 臺——臺所で——煙が——煙が出てゐる。

母 何だとえ。

息子 うん、うん、どうもその——火——火事ぢやないか——と思ふ。

母 火事。何だとえ。

息子 うん——どうも——火——火事らしい。

母 「急いで後景の扉をあける。いきなり真赤な火光に面を合はせる」 火事だ——どうして逃げ出さう——
わたし焼き殺されたくはない。いやだ——。「部屋の中をぐるぐらかけまはる」

ゲルダ 「きやうだいの胸を抱へる」フリートリッヒ、お逃げ。火がやつてくるよ。お逃げ。

息子 逃げられない。

火 聲

七〇一

ゲルダ お逃げ。どんなにしても。

息子 どこへさ。……うん、僕は逃げない……

母 わたしいつそ窓からとびおりよう……〔物見窓の扉をあけて駆け出す〕

ゲルダ あゝ大へん、助けて下さいよう。

息子 まあ逃げ道はあれ一つだ。

ゲルダ お前さんが火をつけたのだね。

息子 さうさ。僕はどうしよう。——ほかにどうにも道はないのだ——それとも何かあるかい。

ゲルダ いゝえ、何もかも焼けてしまふがいいのよ、そのほかにわたしたちはこの情ない境遇からぬけ出す道はないのなもの。ねえフリートリッピ、しつかりわたしを抱へて下さいね、しつかりね。わたしほんたうにうれしい、こんなうれしいことはなかつたわ。これで明るくなつたわ。——可哀さうなおかあさん、あの人はほんたうにどん底から悪い人ねえ……

息子 あゝねえさん、可哀さうなおかあさんさ、こんな暖い思ひをしたことはないだらう、何ていい心持だらう。もうこれで僕は寒くはないぞ。お聞きなさい、あのとほり外ではちく／＼いつてゐる。これで一切、古いものは燃えつくすのだ、一切の古い悪事が、憎みが、恥辱が……

ゲルダ お前さん、しつかりおさへておくれ、わたしたちは焼けやしない、煙で窒息するでせう、何

ていい香がするでせう。棕櫚の木がやけるのだよ、おとうさんの大事な月桂樹がやけるのだよ、こんどは洗濯物の戸棚がやけてゐる。ラフエンデルの香もする、薔薇の香もする。お前さん、こはがることはないよ、ぢきにすんでしまふからね、お前、お前、倒れてしまつてはいけない。可哀さうなおかあさん、あの人はほんたうに悪い人だつた。しつかりわたしをおさへておいて下さい。しつかりね、おさへて折目をつけて、つてよくおとうさんがいつたやうにね。まあ何だかクリスマス晩のやうなこと、あの日一日だけは、わたしたちは臺所で御馳走をお鍋から勝手によそつてはたべたものだ。まあけふだけがあなたも満腹出来るわけだと、おとうさんがおつしやつたつけ……お前さん、あの香が分かるかい。あれは食料戸棚ですよ、お茶やコーヒーが香煎や肉桂や丁子やなんかと一しよに燃える香だよ……

息子 「夢うつで」もう夏なのだ。首蓓が咲いてゐる、夏の休暇がはじまるのだ。ねえさん、覚えてゐるかい。僕たち白い汽船にのつて行つたことを。何しろ塗り立ての船がわたし達を待つてゐるのだから、僕たちはどんなに船を撫でまはしたらう。それからおとうさんが随分よろこんでしまつて、まつたくいふ通り生き／＼した。何でも世の中はいつもかういふ風に行かなくては駄目だとおとうさんはいつたものだ。おとうさんこそペリカンであつたのだな。あの人は僕たちのために自分の毛をむしつたものだ。おとうさんはいつも膝のぬけたズボンをはいて、ピロイドの

襟はすりきれてゐた。その代り僕たちは、伯爵の公達か何かのやうにしゃれてゐたものだ……ゲル
ダ、大急ぎだ、汽船が鐘をならしてゐる。おかあさんは船室に坐つてゐる、いゝや、あの人は一し
よではない、可哀さうなおかあさん、あの人はゐないぞ、まだ岸に残つてゐるのかしら。どこへ
行つたらう。見えないねえ。おかあさんがゐなければ何にもならない。……あゝあすこへやつて
来る。「間」さあこれから夏休みになるのだ。

後景の扉がひとりでに開く。赤い火が輝く。

きやうだい、床の上に倒れる。

—了—

祝祭曲細目

降 臨 祭

第一幕

葡萄山の納骨堂……………八

第二幕

客 間……………三

第三幕

酒 窖……………六

園……………六

第四幕

十 字 路……………七

「待 合 室」……………八

十 字 路……………九

細 目

法 廷

第五幕

客 間

「待合室」

客 間

復活祭

第一幕

第二幕

第三幕

仲夏祭

第一場

メーラルの海岸

第二場

九四

九六

一〇七

一二三

一三四

一七三

二〇〇

二二〇

汽船の上

第三場

納涼市場

第四場

寺の境内

第五場

動物遊園の前

第六場

「城山」の上

小劇場曲細目

稲 穂

妻

跡

三九九

四二四

目 録

目 録

幽 鬼 曲

第 一 幕

第 二 幕

第 三 幕

火 焙

第 一 幕

第 二 幕

第 三 幕

五五五

五九九

五八五

六〇一

六三三

六六二

六八〇

大正十三年六月十七日印刷
大正十三年六月廿一日發行

(定價參圓五拾錢)

◀ 幽場劇小と幽祭祝 ▶

翻譯者

楠 山 正 雄

發行者

東京市牛込區矢來町三番地
佐 藤 義 亮

發行所

新 潮 社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込

八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)轉換

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

「ストリンドベルク戯曲全集」内容(訂正)

- 第一卷 史劇二部作と傳奇劇
マイステル・オロフ・グスタフ・ワサー組
合の秘密——マルギット夫人(騎士ベンクトの妻)
- 第二卷 自然主義戯曲二部作と十一幕物(新刊)
父親——なかま同士——ジュリー嬢——債鬼
賤民(パリア)——熱風(サムウム)——より強いの
の——きづな——火いたづら——死の前に——最
初の警告——借と貸——母の愛
- 第三卷 ダマスキスへ 外二篇(既刊)
曲——白鳥姫
- 第四卷 死の舞踏 外二篇
死の舞踏、第一部、第二部——煙醉——へムゼー
の人々
- 第五卷 祝祭曲と小劇場曲(新刊)
降臨祭——復活祭——仲夏祭——稲妻——燒跡——
幽霊ソナター——ベリカン
- 第六卷 童話劇と韻文曲
幸福なペーテル——天國の鍵——冠の花嫁——ア
ブ・カセムの上靴——クリスマスおめでたう——街道
- 第七卷 遺稿と習作戯曲
ソクラテス——世界史劇——三つの一幕物——四
十八年

「ストリンドベルク小説全集」内容

- 第一卷 ■女 中の子 第六卷 ■赤い部屋
- 第二卷 (自叙傳) ■或る魂の發展 第七卷 (長編) ■島の農夫
- 第三卷 ■痴人の告白 第八卷 ■大洋の岸にて
- 第四卷 (小説) ■地獄傳説 第九卷 (小説) ■ゴシックの部屋
- 第五卷 ■不和、孤獨 第十卷 ■黒い旗

近刊 □ 不和、孤獨 (印刷中) 伊藤武雄 譯
近刊 □ 或る魂の發展 秦豊吉 譯

女優 フアンニイ・ファルクネル著 秦 豊吉氏譯

ペストリンドの最後の戀

菊半截判
特製最美本
定價壹圓
送料六錢

寫眞目次

十九歳の著者。三十一歳の著者。白鳥社に扮せる著者。二度目の夫人。三度目の夫人。六十歳のストリンドベルク。

極め興味多き書

「私の妻とは、私の美しい囚人看守だ。」とストリンドベルクは、「地獄」の中で呪ひ乍ら、猶ほ三十歳にして結婚して別れ、四十歳にして二たび娶つて去らしめ、五十歳にして三度迎へて捨てられたのである。此の悲痛なる結婚生活は、各種の作品によつて世人の熟知するところであるが、既に白髪を戴いた六十歳のストリンドベルクが、僅に十九歳の少女たりし著者を戀して、これを其膝に抱いたことは全く世に知られてゐない。而も悲むべき餘りの年齢の相違が、此の可憐の少女をして彼と肉慾に陥るを躊躇せしめた關係は、此の書によつて初めて世間に暴露されたのである。此の老文豪が、如何にして少女を口説いたかといふ好色生活の一面に、如何に子供を愛する好老爺であつたかといふ彼の日常生活は勿論、晩年の交友、性癖、臨終に至るまで、未だ世に現れなかつた極めて興味多き消息は、今猶ほ三十餘歳の現存せる當時の戀人によつて、詳細に、率直に、赤裸々に叙述された。ストリンドベルクの人間としての生活——この老文豪の好色生活は、本書によつて、讀者を驚倒せしめ、且つ涙ぐましめるに違ひない。書は、最近獨逸で公にされ非常に評判になつたもので、秦氏はその歸朝土産として譯出されたのである。

505

65

終